
アルステミア ～花と心と恋の唄～

空海林

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルステミア　　く花と心と恋の唄く

【Nコード】

N4386L

【作者名】

空海林

【あらすじ】

魔法が普通に存在する世界での物語。

魔法学園『アルステミア』へ転校することになったアキラは、そこで様々な人達と出会い、心を動かされていく。アキラは新しい学校で、どんな生活を送るのか？

夢と魔法の学園生活が始まる…！

P1 哀愁の別れ

「『カルルテ』!」

持っているスケッチブックに、色鮮やかな風景画が写し出される。ペンや絵の具の類は一切使用されず、まるでプリンターか何かで印刷されているかの様に。

こうして描かれた絵は、まるで写真を切り取ったかの様な綺麗さだった。

「さっすがアキラ君、相変わらず上手だね! あたしなんて見てよ、ほら!」

そう言う女の子が手に持っているスケッチブックには、同じく風景画が描かれている。これは…、桜だろうか? 特に下手という訳では無いのだが、アキラの桜の絵と比べると見劣りしてしまう。

「でも、ハナの絵ってなかなか味があるじゃん? 俺の絵はただ景色を写しとってるだけだしさ」

女の子の名前は桜木ハナ（さくらぎはな）。

俺の幼なじみで、こう言ってしまうのも何だが、結構可愛い。

「味がある…かぁ。そうかなあ? あたしにはよく分かんないや。もしかして、こういうところが絵の才能の有無の差なのかな?」

「うーん、どうだろうな? そういう点じゃ俺もハナとそう変わらない気がするけど」

ハナは芸術面に関しては一般レベルだが、運動面では秀でている。人それぞれ得手不得手があるのだ。

ちなみに、俺は運動面より専ら芸術面に秀でていると思う。

「にしても、この町での生活が今日で最後だと思うと、何だかさみしくなってくるな」

俺は、転校する。

親父の仕事の都合らしいけど、詳しいことはよく分からない。

「確か…、遠い所なんだよね。あたしもさみしいよ…」

悲しそうな顔になるハナ。

「でもさ、心配しないで。転校しちゃった後も手紙とかいっぱい送るから。あ、時々会いに行っちゃおうかな？」

「ああ。期待してるよ。俺もたまに帰ってくるからさ」
そして俺は、目一杯の笑顔で言う。

「次会うのを、楽しみにしてろよ！」

俺の部屋から見える桜は、少しずつ花が開き始めている。

次にこの桜を見るのは、いつになるのだろうか？

それからしばらくハナと二人で話し、俺は車に乗りこの町を去った。

「また、会えるよな、ハナ……」

P 2 偶然の出会い

「ここが俺の新しい学校か……」
思っていたよりもずっと大きいんだな。

この世界には、魔法と呼ばれるものが普通に存在していて、俺達の生活はほとんど魔法に支えられている。もっとも、魔法だけだと不便な時もあるから、電化製品などもある。

「この学校に通うのは明日からだし、今日は町の中を見て回るか」
新しく暮らすことになった町だ。ある程度のことは知っておかなければ、後々不便だろう。

アキラは学校『アルステミア』を後にし、商店街へと向かうことにした。無論、町に慣れる為に徒歩でだ。

「でも、どこから行けばいいかさっぱりだよな。こんなことなら、一旦家に戻ってからにした方が良かったか？」

俺の家と学校とでは、かなりの距離がある。下手に家に戻ったりすれば時間がなくなり商店街の方へ行けなくなるかもしれない。

学校が始まったらそう簡単には行けないかもしれないから、今日の内に行ってしまうのが得策だ。

しかし、肝心の商店街に着けなければ意味がない。こういう時に限って地図やら交番やらがない。携帯も運悪く家に忘れてきてしまった。

：誰かこの町の人にでも聞いてみるか？新しい町では人との交流が大切だから、そういう意味でも名案かもしれない。

「あの、すみません。商店街に行きたいんですが、道を教えていただけませんか？」

とりあえず近くにいた学生に声をかけてみた。お昼時だからか、学生の姿がちらほら見える。

「は、はい……。何、でしょうか？あ、み、道ですね！えっと、ここを真っ直ぐ行ったら――」

良かった。親切に教えてもらえた。人と話すことが苦手なのか、妙にオドオドした女子だな。制服からして『アルステミア』の学生らしい。

「どうもご親切にありがとうございました」

「あ、あの…」

アキラがお礼を言い、立ち去ろうとすると、その女子に突然呼び止められた。

「どうかしましたか？」

「いや、その…。お、お名前を教えてもらってもいいですか？」
オドオドしているせいか、正面から顔を合わせるのは苦手らしい。
だからといって上目遣いで見られるのも、いちいちドキドキしてしまっている。

「あの、私はカナンと言います。真中カナン（まなかかなん）です」

「真中さん：ですか。俺は崎守アキラ（さきもりあきら）といいます」

一応自己紹介はしておく。まさか道を聞いただけで自己紹介することになるとは思わなかったが、これで町の人とも交流を深めることができたのだと思えばなかなかありがたい。

それに、同じ学校の生徒ならば友達になれるかもしれない。この町に来たばかりで知り合いがいらないからこれだけでだいぶん安心できる。
「俺は明日から『アルステミア』に通うんです。なので、もしかしたらまた会えるかもしれませんね」

「ほ、本当ですか！それは、う、うれし…はうっ！」

そう言ってカナンは顔を手で覆ったまま俯いてしまった。

「あ、あ、あ、後。その、敬語は、いいです。多分同じ年位だと、お、思うので。いえ、違ってもいいんです…」

「それじゃそうさせてもらおうよ。あ、だったら真中さんも敬語じゃなくていいから」

「いえ、その…。私は、い、いいんです」

どんどん声が小さくなっていく。

もう少し自分に自信を持て落ち着いて話したら普通に話せるのではないだろうか。

「真中さん。リラックスしてみてください」

「え、ええ！？リラックスですか！？えっと、こう…、すう、はあ。あ、少し落ち着きました」

「そう、良かった。それじゃまた明日、機会があったらな」

「はい。ではまた明日…」

これで真中さんが少しでも人とうまく話せる様になっていればいいのだが…。

とりあえずそれはそれとして。今は道を忘れない内に商店街へ向かうことにしよう。せっかく教えてもらったのに忘れてしまうのは失礼だろう。

「さて、ここの商店街はどんな感じなんだろうな」

期待に胸をときめかせながら、真中から聞いた道を進んでいった。

「楽しい学校生活、おくれるかな…」

P3 巨大な商店街

「凄いな……。ここの商店街は」

俺が前住んでた町にあった商店街とは比べものにならない。

人通りが多く活気に溢れていて、見ていだけで気分が高まってくる。

もちろん前の町と同様に魔法具専門店も存在しているが、その規模もかなり大きい。

流石に世界でも随一の魔法学園がある町だ。普通の町以上に魔法の発展に尽くしているようだ。

「とりあえず魔法具でも見てみるか」

これだけの規模ならば、品揃えもかなりのものなのだろう。今持っているロッドよりも高性能なものがあれば、使える魔法のレベルも上がるだろう。

基本的に魔法はどのロッドでも使えるが、ロッドの性能が良い方が魔法は扱いやすくなる。

アキラが店の中へ入ると、まず無数の魔法玉が置かれた棚が目に入った。

魔法玉とは魔法の力が込められた玉のことで、これを使用することにより自分には使えない様な魔法も使用することができ。

ただし一つの魔法玉につき使える回数は基本的に一回のみで、また値段もある程度はする。その分魔法はレベルの高いものや便利なもののばかりだが。

今のアキラの財産から考えて、魔法玉には手を出せない。安いものならば買えるが、一度きりなので今買うのは得策ではない。

魔法玉コーナーを後にして次に見えてきたのは、食品のコーナーだ。無論普通の食品ではなく、魔力を回復させたり増幅させたりなどといった効果を持っているものである。

魔法を使う為には魔力と呼ばれるものが必要で、魔法を使えば魔力

はどんどん減っていく。しばらく休めば魔力は回復するのだが、緊急で回復させたい時には魔力回復アイテムを使う。また人によって持っている魔力の量は違う。

このコーナーも今は必要ないか。

他にも特殊魔法具などのコーナーもあったが、今見たいのはロッドのコーナーなので、基本的にスルーした。

ロッドのコーナーへ着くと、そこには無数のロッドが置かれていた。デザインが奇抜なものもあり、見ているとなかなか面白い。先にハートの飾りが付いたものもある。

「そうだな。この星の付いたロッドなんてなかなか面白くていいかもな」

俺が気になったのは先に星型の飾りが付いたロッド。性能も今のより良いし、魔法を使う時に星が辺りへ飛び散るなんて綺麗だし良さそうだな。値段も買える位だし。

アキラはそのロッドを取り、レジへと向かう。

「1800オンになります」

オンというのはお金の単位で、名前の元は昔の英雄『マルグラドⅡリオン』から取ったものだ。異国の人も関わらずこの国を危機から救ってくれたらしい。

新しいロッドを手に出ると、やはり活気溢れる商店街がそこにはあった。

人が多過ぎて他の店がよく見えないが、面白そうな店もある。今度時間があれば寄ってみよう。

時間的にはそれほど晚くはないが、アキラの家からは少し離れている為、今から帰らないとマズイ。

学校から商店街への道は分からなかったが、家からの道ならば分かる。

俺は家の方へと向かった。

何事もなく家に着き、自分の部屋に戻る。

新しいロッドも試してみたかったから、スケッチブックを取り出しロッドを構える。

「『カラルテ』」

俺の声の後、ロッドの先からは星が飛び散り、俺は星に包まれた状態でスケッチブックを見ていた。

そのスケッチブックにはいつもと変わらず写真のような絵が写し出された。流石にこれくらいの魔法ならばたいした差はないか。

何にしても、なかなか面白い。幻想的だ。

「アキラ、ご飯！」

「分かった。今行く」

俺の部屋は二階にある。リビングは一階にあるから、階段を降りて一階へ向かう。

「今日は肉じゃがか」

「ええ。アキラ好きでしょ？明日からは新しい学校なんだから頑張ってもらおう為にね」

「ありがと、母さん」

席に座り、俺の肉じゃがに手を付ける。

「そういえば父さんは？」

「今日から新しい仕事先でしょ？いろいろと説明もあるみたいだから晩くなるって」

今は俺と母さんと父さんの三人で生活している。本当は兄さんもあるけど、成人して今は一人暮らしをしている。

「あ、この肉じゃが美味しい。やっぱ母さんの肉じゃがは最高だな」

「あら、ありがとう！そう言ってもらえて嬉しいわ！」

それからこの町でのこと話しながら肉じゃがをどんどん口に運んでいか、俺の部屋に戻った。

そして俺は、昼間出会った女の子のことを思い出す。

「真中さんと、友達になれるかな…」

P 4 豪快な生徒会長

「ああ、眠…」

外では鳥が元気に鳴きながら飛び回っている。

俺は昔から朝が苦手で、起きるのには苦勞する。

「…そうか。今日から新しい学校か」

ベッドから起き上がり、昨日の内から用意しておいた制服に手をのばす。

着替えを終え洗面台へと向かいすることを済ませ、リビングへと向かう。

「今日からは新しい学校よ。早く友達ができるといいわね」

「ああ。そうだな」

今日の朝食はご飯にみそ汁、目玉焼きなどといった定番メニューだ。母さんの料理は全体的に美味しいので、嫌いではない。

食べ終え鞆を持ち、家を出る。寝坊したという訳ではないのでゆっくりと歩いている。

それからしばらく歩くと、『アルステミア』が見えてきた。

「やっぱり大きな。学園内で迷いそうだな」

学園内に入ると、更にその大きさに驚く。地図があったので確認したところ、かなりの大きさがある広場やカフェ、空中庭園などもあるらしい。全部回りきるにはどの位かかるのだろうか？

「さて、俺の教室は…」

俺は2-Dらしい。

学園も大きい、地図もやはり大きい。教室一つ見つけるにも一苦勞だ。

「…三階か。結構面倒臭い場所だな」

校舎に入ると、大きな螺旋階段があった。

これを歩いて登るのは大変だな。

「『フロウメル』」

俺の体が軽くなる。そのまま一気に上まで跳躍する。三階まで昇ったのを確認し、手摺りに手をのばす。

「よし、楽勝！」

何とか三階までたどり着ける…、と思いきや。

「はい、危険行為発見！今から下まで降りてもらいます！」
手を弾かれ、そのまま俺は落下する。

「うわああああっ！」

当然ながら床に激突する。フロウメルを使っていた為衝撃は少ないが、それでも少しは痛い。

「痛ててっ。何だよ、あいつ…」

仕方なくもう一度跳ぼうとしたその時だった。

「ていりやああああ！」

俺目掛けて跳び蹴りをしてきた女子を見つけたのは。

「ぐふうっ！」

見事なまでに跳び蹴りは俺に命中し、そのまま女子は俺の背中を踏みつける。

「今また跳ぼうとしたでしょ！危険行為だって言ったばかりだよね？」

「別にいいだろ？面倒臭いし…」

「馬鹿？あなた馬鹿？字が読めないの？そこに書いてあるよね？」
階段は歩いて登りましょう】って！」

た、確かに。気がつかなかった。

「…それよりも、早くどいてくれ。つーか誰だよ」

「はあ？あなたあたしを知らないの？あたしは早宮メイコ（はやみやめいこ）やめいこ）。生徒会長よ！しっかりと記憶に刻みなさい！」

「せ、生徒会長？」

なるほど。俺がルールを守らなかったからこうやって注意されてるのか。かなり暴力的な制裁を下されているが。

「さあ！あたしに直接制裁を下してもらったことに感謝しなさい！そしてひざまづき、こう言うのよ！」
「ありがとうございます、メイ

コ様！一生あなたに尽くします」ってね！」

「絶・対・嫌・だ」

「へえ、そんなこと言うんだ？」

「ぐうっ！」

余計に強く踏みつけられる。

「さあ、言いなさい！」

「何で言わなきゃならないんだよ！」

「…そんなに嫌？」

「当然！」

「…それじゃ仕方ないわね。特別に召し使いつただけで許してあげるわ」

「絶対許されてない…」

召し使いつて、一体何やらされるんだ？恐ろしい想像しかできない。

「まあいいわ。とにかく、ちゃんと階段を登ること！分かった？」

「はい、分かりました！」

やっとどいてくれた。あんな人が生徒会長だなんて、大変だな。下手に校則を破れば何されるか分からない。

とりあえずやっと動ける様になったんだし、教室に向かうか。勿論階段で。

「ふう。疲れた…」

跳べばあつという間だが、階段だとかかなりの距離になる。これを毎日となるとキツイ。

教室は更に奥にあるらしいので、またある程度歩かなければならない。

しばらく歩き、やっとの思いで教室に着く。

さっきのことがあったせいで時間はギリギリになっている。既に先生は教室にいるハズだ。

俺は静かにドアを開ける。初めての顔に、当然皆の注目は集まる。

「あ、えと。今日からこのクラスで過ごすことになった崎守アキラ

です。よろしく願います」

簡単に自己紹介を済ませ、先生の指示の元俺の席へと向かう。が、途中で俺の動きが止まる。俺の目線の先には見知った顔があった。

「ま、真中さん…」

「さささ、崎守君!？」

それは、昨日出会った女の子、真中カナンだった。

アキラはカナンの席へと向かい、話しかける。

「あ、同じクラスだったんだ。真中さん…」

「あ、あの、えと、その…」

相変わず緊張している様だ。

「真中さん、深呼吸」

「あ、はい。すう、はぁ。ふう」

なんとか落ち着いたみたいだ。

「き、奇遇ですね。その、あの…」

「良かったら友達にならない? 知ってる人がいなくて不安だったんだ」

「あ、私でよければ、その…喜ん、で…」

声がだんだんと小さくなっていく。

「じゃ、そろそろ席に着くよ。また後でな」

「は、はい…」

そう言い、席に着く。

ちらりと真中さんを見て、アキラはふと思う。

「真中さん、可愛いかも…」

P5 最初の友達

「『ブロールテ』」

アキラの持っている石はどんどん削れていき、一つの形へと変わる。「タンポポですか。今の季節にも合いますね。形もしっかりしていて素晴らしい出来です」

先生が評価してくれる。

今は《造形魔法》の授業で何か好きなものを石で造れとのことだったので、簡単にタンポポを作ってみた。

「物凄くリアルだな」

「崎守、上手だね」

「俺もそんな風に上手ければなあ」

クラスメイトからも良い評価を得ることができた。これがきっかけで友達も増えるかもしれない。

「何かリクエストとかある？ あれば造るけど」

「あ、じゃあイルカ！」

クラスメイトと仲良くなる為に、少しでも良い印象を残そう。

「『ブロールテ』」

持っている石が、今度はイルカへと変化していく。なかなか良い出来だ。

「凄い！」

「他には？」

「桜は？」

桜…。

つい前の町を思い出してしまう。ハナ、どうしてるかな…。俺は首を振り、その考えを打ち消す。今は考えるな。まずは友達を作らないと！

「『ブロールテ』」

持っている石が桜の形になる。

「凄っ！何でこんなに上手いんだよ」

「昔から芸術系のものは得意なんだ」

芸術系が得意だとか普段は考えないが、今はこれがありがたく思う。そういえば、真中さんは？

今俺の周りにはいない。他の友達と一緒にいるのだろうか。何人かで楽しく話しながらでも造っているのだろうか。

ふと真中さんの席に目を向ける。

確かに、真中さんは何かを造っていた。

…一人で。

どうして一人なんだ？一生懸命に造っているから気を使って一人にしておいてあげてるのか？

それならいいのだが…。

カナンの表情は、アキラにはどこか寂しいものに感じられた。

授業が終わり、休み時間になった。

さっきは、カナンのことは気になったが、周りの人のリクエストに答えていたアキラはカナンの席へ行くことができなかった。

だが今ならば行くことができる。

「真中さん」

「さ、崎守君…」

カナンは、俯いていた顔を上げる。

「ど、どう、したの？」

「真中さん…、友達は？」

休み時間になっても真中さんの元へ行く生徒を一人も見えていない。これでは俺も心配になる。

「あ、あの、それは、その…」

「友達、いないのか？」

「はうう…」

どうやら凶星のようだ。

「でもどうして？真中さんは優しいし…その、か、可愛いのに」

「か、可愛い…」

カナンは少し嬉しそうな顔になった。

「でも、私…。こ、こんな風に、緊張、しちゃう、から…」

「それで話し難い…か」

「…はい」

確かにそうかもしれない。話すペースが合わない人とは気軽に話すことはできないだろう。

「ならさ。これから少しずつでも直していけばいいんじゃないか？俺も協力するし」

「でも、それじゃ、め、迷惑じゃ…」

「平気さ。だって真中さんは俺がこの町に来てから最初の友達だからな」

そして真中さんに笑いかける。

「友達が困っている時は、協力するもんだろ？」

「と、友達…」

少しカナンの顔が赤くなった。アキラは全く気付いていないが。

「あ、ありがとう、ございます…」

これから少しずつでも、普通に話せるようになれば、きっと真中さんにもたくさん友達ができるよな。

友達、か…。

「ハナ…」

P 6 学校の見学

今日の授業が全て終わり、放課後がやってきた。

この学校に来てから初めての放課後だ。

そうだな、とりあえず学校の中を色々見て来るか。

そう思い、アキラが席を立とうとした時、突然誰かに話し掛けられた。

「あ、あの、崎守君。よ、良かったら、あ、案内とか、しましょうか？」

「本当？じゃ、お願いしようかな」

ただ一人で見て回るよりも校内に詳しい生徒と見て回る方が圧倒的に効率が良い。そして何より、楽しい。

友達になったばかりの真中さんと、少しでも早く仲良くなるにはもってこいだ。

「最初はどこに行く？」

カナンはしばらく考えた後、答えた。

「と、とりあえず、広場にでも、行き、ませんか？」

「広場か。ちょうどここからも近いし、行きやすいからな」

来た時に地図は見ていたので、学校内の地形は大まかに覚えている。本当は三階ということもあり空中庭園の方が近いのだが、そこは今調整中に入れないと、担任の先生に言われた。

後は校舎内のカフェというのもあるが、何も一番目に行く必要は無いだろう。

「ひ、広場は、こっち、です」

真中さんについていき、広場へと向かった。

「ここが、広場、です」

なるほど。地図を見た時から大きいとは思っていたが、実際に見てみると、その大きさが身に染みて分かる。広場の奥が遠すぎて見え

ない程だ。

「草木も多くて、綺麗な場所だな。スケッチするにもピッタリだ」
俺の趣味はスケッチである。俺個人的には魔法で描くよりも自分の手で、筆を使って描く方が好きだったりする。もともと、筆や絵の具といった道具は滅多に売っていないため、絵を描く時には基本的に魔法を使う様にしている。

「風も気持ち良いし、最高の場所だな」

「でも、ここよりも空中庭園の方が、綺麗なんです」

「そうなのか。今度調整が終わったら行ってみようかな」

「それが良いと、思います」

真中さんが笑顔で言った。

そういえば、真中さんの喋り方が少し滑らかになっている。
ここは広いため、あまり近くには人がいない。だから緊張が和らいでいるのかもしれない。

人がいる所でもこうやって話せたら良いのにな。まあそれは、少しずつ慣れていくしかないか。

「少し進んでみる？」

「はい！」

真中さん、凄く楽しそうだ。こういう自然のある所が好きなのか？それとも友達一俺が一緒だからなのか？どちらにしろ、嬉しい。

二人で色々と見て回りながら、広場を一周した。

「一周したただけなのに、結構晚くなったな」

一周回るだけで、一時間程掛かった。ゆっくりと歩いていたからでもあるだろうが、それでもかなりの広さである。

「次はどこに行く？」

「か、カフェ、何て、どうでしょう、か？」

「カフェか。一度行ってみたかったんだよな」

前の学校には、カフェ何てものは無かった。なので、学校内にカフェがあるというのも不思議な感じだ。

「でも平気？カフェだと人が多いんじゃない？」

さっきの広場は人が少なかったから良いものの、やはり真中さんは人が多い所は苦手なのだ。

現に、ある程度人がいるここだと真中さんの喋り方が途切れ途切れになっている。

「だ、大丈夫です」

「それなら良いけど」

「それに…」

「それに？」

カナンは少し俯きがちに言った。

「崎守君が一緒だと、安心します」

……………！

真中さん…。今だけだけど、喋り方が滑らかになった。

それに、一緒だと安心するって…。そんな事を言われたら、照れる。でも嬉しい。

アキラは動揺を悟られないように、斜め上を見ながら話した。

「そ、そうか。なら良かった。じゃ、行こうか」

「はい！」

二人はカフェの方へと歩き出した。

二人とも顔が赤くなっている事を、お互いに気付くことは無かった。

カフェに着いた。

室内席だけでなく、屋外席も多数設置してある。というか、屋外席の方が多い。

雨の日などの時は、どうするのだろうか？

俺は初めてでよく分からないし、真中さんは緊張しているようなので、二人で注文しに行くことにした。

「俺は…、カフェラテで。真中さんは？」

「あ、アイスココアを、お願い、します」

店員の男性が注文を聞き終えると、その周りの店員がせっせとカフ

エラテとアイスココアを作り始めた。

店員の手際のよさに關心していると、注文を受けた店員が話し掛け
てきた。

「お二人はカップルですか？羨ましいですねえ」

突然の言葉に驚く。

それは真中さんも同じな様で、真中さんもあたふたしている。

「あ、いや、別にそういうのじゃなくて…」

「照れない照れない！はい、ご注文の品です。ストローは一本でいい
ですか？」

「いや、二本下さい！」

「ははっ、分かってますって。冗談ですよ」

渡された飲み物を受け取る。持って行こうとするのだが、手が震え
て運び難い。

「あ、僕が持って行きますよ」

そう言うのと店員は俺の持っていた飲み物を取ると、そのまま屋外席
の人が少ない場所へと運んでいった。

俺達もそれについていき、席に着く。何だかんだで人が少ない席の
ため、真中さんにも良いかもしれない。

「ではごゆっくり！」

そのまま店員はレジへと帰っていく。かと思いきや、途中で引き返
して来た。

「僕は田口レン（たぐち れん）といいます。何か困った事があつ
たらいつでも来て下さいね」

そう言い、今度こそレジへ帰って行った。

「ふう。びっくりした」

「か、カップル…」

真中さんが真っ赤になっている。まあ、カップルと勘違いされたん
だし、当然の反応だろう。多分俺の顔も、真っ赤になっていると思
う。

「とりあえず、飲もうか」

「は、はい」

俺はカフェラテを、真中さんはアイスココアを飲み始めた。

「はぁ…、落ち着きます…」

真中さんの顔がかなり綻んでいる。

その顔は、なかなか可愛かった。

P7 男子の嫉妬

しばらくカフェでゆっくりしていると、いつの間にかかなりの時間が経っていたようで、辺りは薄暗くなっていた。

「さてと、時間も晚いし、帰るか」

「そ、そうです、ね」

「結構暗いし送って行こうか？」

「そ、それじゃ、お願い、します…」

真中さんの顔が少し赤くなっている。人が多い場所にいて緊張したからだろうか。

「ところで、真中さんの家ってどこにあるんだ？」

「あ、あの、商店街の方、です」

なるほど。初めて真中さんに会ったのは商店街に割と近い所だった。あの辺りに真中さんの家があるのだろうか？

一度あの辺りまで行くと、俺が家に着くのはかなり晩くなるだろう。まあ、それでも真中さんの安全の方が大切だし、仕方が無いか。

学園を出てしばらく歩いた所で、アキラはかなり焦っていた。

会話が…、良い会話が出てこない…。

俺が真中さんを誘っておきながら会話が無いのはあまりにキツイ。折角友達になれたのに、こんな事で溝が出来てしまうなんて事になったら最悪だ。何か面白い、いや、この際面白く無くてもいいから何か話が出て来ないものか。

などと考えていたら、真中さんがその間を埋めてくれた。

「あの、『アルステミア』はどう、ですか？楽しく、過ごせそう、ですか？」

「多分な。ある程度クラスの人とは馴染めてきたし、何より…」
口に出すのはかなり恥ずかしい。でも、これが今の俺の本当の気持ちだ。

「…真中さんもいるしな」

「……………」

カナンがふっと俯く。

勿論、アキラも俯いた。

しばらくの静寂…。

それを破ったのは、もしかしてもカナンだった。

「あ、あの、そ、それって、あの、えっと…」

カナンは動揺で正常に働いていない頭で、何とか言葉を紡ぐ。

「わ、私も…です」

「えっ？」

「私も、崎守君と、一緒に、いられて、とても、楽しい、です…」

「真中さん…」

二人の足が止まる。

そしてお互いに向き合った。

「俺は…」

「おっ、ラブってるカップル発見！」

突然、背後から声が聞こえた。

「学校帰りに下校路でラブるなんて、なんつー贅沢なっ！」

後ろを振り返ると、そこには一人の男子生徒がいた。拳を握り締め悔しさに震えている。

「…ん？誰かと思えば、転校生か。何だよ、転校初日からラブラブか？いきなりフラグ立っちゃってるのか？どこのギャルゲーだよそれ！」

一体何を言っているんだ？よく分からない。

というか、何か誤解している様な気がする。

「…お前は？」

「何だ、知らないのかよ。俺は三門 エイ（みかど えい）。お前と同じクラスだ」

三門か。知らない。

「で、何の用だ？」

「決まってるだろ！下校途中にラブってる生徒の監視さ」

監視？何で監視されないといけないんだ？別に人がラブろうと、人の勝手だろ。

関わるのが面倒臭くなり、アキラはそのまま立ち去ろうとした。が、エイに回り込まれ、進めない。

「いい加減どいてくれないか？」

「くそっ、カップルだと？馬鹿にしゃがって！彼女いない歴〓自分の年齢であるこの俺をナメるなよ！」

ああ、話を聞いちゃいない。このままだと通れないな。

仕方が無い。魔法で何かすか？

「『フロウラス』！」

ロッドを振ると、無数の星が散らばると同時に、風の魔法が放たれる。これが当たればエイは一時的に浮かび上がり、邪魔する事は出来なくなるだろう。

あと少しで当たるところで、エイはスッとロッドを取り出し、一言呟く。

「『クリアメル』」

すると、エイに当たるハズの魔法が、エイに当たる直前に消滅した。何故だ？

「俺にその程度の魔法は効かないぜ。残念だったな」

三門の周りには、不思議な膜の様な物が見える。どうやらあれに遮られたらしい。

「さあ、これで分かっただろ？なら大人しくその彼女を俺に…」

「『ビックバラス』！」

背後から声が聞こえた次の瞬間、俺の視界は真っ白になる。

視界が回復すると、そこには爆発に巻き込まれたかの様な三門が倒れていた。

「今の…は？」

見た事の無い魔法だ。さっきの声は背後から聞こえた。

恐る恐る振り返ると、そこにはカナンがいるだけだった。

まさかあれは…真中さんが？

エイが少し起き上がり、カナンの方を見ながら言った。

「まさか…、崎守の彼女が…、真中だったなんて…。迂闊だった…」
また倒れる。

どうやら三門は、真中さんの事を知っている様だ。それに、真中さんを恐れている気もする。

真中さんって、一体…。

P8 大切な友達

「真中…さん？」

呼んでみたが、真中さんは返事をしない。

さっきの爆発の魔法は、まず間違いなく真中さんのものだろう。だが、何故？確かに三門には迷惑していたが、別にそこまでする様な状況では無かったハズだ。それに、真中さんがそんな事をするなんて、普段の真中さんからは考えられない。

まさか、真中さんは三門に恨みを抱いていたとかか？

とにかく、真中さんに直接聞いてみる他無い。

「真中さん、さっきのは…」

カナンはアキラの方を見つめ、言葉を遮る。

「何？何か問題でもあるの？」

「え、いや…」

今の…、真中さんにしては異様にハッキリとした喋り方だった。それに、今までと違い何処となく冷たい感じがした。

何故だ？

あれは一体誰だ？

「真中さん…、だよな？」

カナンはアキラの方に歩いて行き、言った。

「あたしの名前を気安く呼ばないでくれる？はっきり言ってムカつくから」

カナンのものとは思えない様は、冷たく鋭い言葉。それはアキラの胸に、深く突き刺さる。

さっきまで、あんなに仲良くしていたのに。あんなに優しくかったのに。

一体どうして？

「ねえ、邪魔なんだけど」

「あ、ああ。悪い」

道を避け、真中さんに道を空ける。

カナンはエイの前まで行き立ち止まる。

そして一瞬、黒い笑みを浮かべたかと思うと、あろうことかカナンはエイを蹴り飛ばした。

「道の真ん中に倒れてて本当に邪魔。ウザイ。さっきもうるさかったし、最悪！」

飛んでいったエイの元へ再び歩き出し、今度はエイの襟元を掴み持ち上げた。

「うっ、真中……」

エイが目を覚ます。

虚ろだった目が、カナンを見た途端に豹変し、恐怖に怯えた目になった。

「さ、さっきは本当にすいませんでしたっ！もう二度とこんなマネしないので……」

エイはカナンを全力で振り払い、

「許して下さいっ！」

全力で走って逃げていった。

「ちっ、逃げられたか」

カナンは舌打ちをし、そのまま一人で帰ってしまった。

「何だよ、今の……」

本当にあれは真中さんだったのか？

動揺で震える体を何とか動かし、アキラは家へ帰る事にした。

翌日。

俺は席に着き、外の景色を眺める。昨日は晴れていたのに、今日は曇っている。広場に行ったのが昨日で、本当に良かった。

ふと、真中さんの事が気になり、真中さんの席を見る。

真中さんは、相変わらず一人だ。

友達として行ってあげたい気はするのだが、体が動いてくれない。

昨日の事をまだ引きずっている。

三門は、今日は学園に来ていない。あの爆発に巻き込まれて無事なのだろうか？今日いないのは間違いない。あの爆発が原因だろう。だが三門よりも、気になるのは真中さんだ。
：ま、もう少し時間が経てば真中さんに会いに行けるだろう。それまでは別の事を考えよう。



昨日は、崎守君を置いて一人で先に帰ってしまった。せっかく一緒に帰ることが出来たのに、友達になれたと思ったのに。
今日は崎守君、私に近づいてくれない。やっぱり昨日のあれが原因なんだよね。

今までもそうだった。話のペースが合わないだけでも十分に関わり難いのに、ましてや突然乱暴になったりして……。そのせいで、友達なんて出来たこと、無かった。
だから、崎守君が私にとっての最初の友達になってくれると思ったのに……。やっぱり、無理なんだ。

私は、どうやら二重人格というものらしくて、普段は大人しく、緊張しがちな性格なのに、時折昨日みたいに乱暴な性格になってしまう。

お医者様に通ってるおかげで乱暴な性格が出ることは少なくなったけど、それでもたまに、気分が高まった時などには出てきてしまう。何とか改善できれば良いんだけど、全然上手くいかない。

カナンは顔を机に伏せ、自分の二重人格に、離れていってしまったアキラに、泣いた。

崎守君……。私は……。

どうしたら良いの？



あれから何時間もの時間が経ち、午前中の授業は全て終了した。次は昼食の時間である。

結局、真中さんとは一言も話せていない。心のどこかで、真中さんと関わることを拒んでいる気がする。

いや、駄目だ！真中さんとは友達になったんだ、こんなことで関わることを拒んだりしたら駄目だろ！

よし、昼食は真中さんを誘って、2人で食べよう。もちろん、人の少ない屋上辺りで。

アキラは席を立ち、カナンの席へと近づく。

「真中さん」

何かを考えていたかの様にボーっとしていたカナンは、アキラの声を聞き、かなり驚いた様だ。

「さ、崎守…君」

「一緒に屋上で昼食にしないか？今日は曇っているから紫外線とかもあまり気にならないだろうし」

「で、でも…」

カナンは下を向き、しばらく考えた後に、言った。

「私と、一緒にいる、なんて、め、迷惑じゃないですか？」

今度はアキラの方を向きながら言った。

「嫌じゃないです、か？」

カナンは今にも泣きそうな顔になっている。

アキラは、そんなカナンの手をそっと握った。

「嫌なわけ無いだろ。だって…」

カナンの目をじっと見つめ、言葉を繋いだ。

「俺達、友達だろ？」

「……………！」

カナンの目から、一筋の涙がこぼれた。

俺は涙を指でそっと拭う。

「昨日、真中さんがあなった訳は分からないけど、別に俺はそんな事、どうだっていいんだよ。だから、元気出せ。なっ！」

溢れ出す涙を両手で拭い、カナンは微笑んだ。

「…うん！ありがとう！」

カナンは弁当箱を取り出し、アキラに手を引かれながら屋上へと走っていった。



崎守君は、私を見捨てないでいてくれた。友達でいてくれた。その事が嬉しくて、自然と笑みがこぼれてしまう。

カナンは、アキラに聞こえない位小さな声で、そっと呟いた。

「崎守君…、私は、崎守君の事が…」

P9 屋上の段差

『アルステミア』の屋上には、ちょっとした段差がある。段差がある方向はちょうど広場のある方向で、この場所に座って見る景色はとても綺麗だと、生徒に人気のスポットになっている。もっとも、晴れている日ならともかく、曇の日はこの場所へ来る生徒は少ないため、今いる人はアキラとカナンだけである。

その段差に、アキラとカナンが並ぶように座っている。二人は弁当箱を開けた。

「わ、崎守君のお弁当、とっても、おいしそうです」

今日の俺の弁当は、ご飯にエビフライ、卵焼きなどといった、弁当の定番アイテムのみで構成されている。だがそんな定番アイテムも、俺の親の手により様々なアレンジが加えられていて、かなりおいしそうな弁当になっている。俺が言うのも何だが、俺の親は料理が上手いのだ。

「真中さんの弁当は、すごく可愛いな」

「ほ、本当ですか？ 私が、作ったんです、けど…」

「ああ。それに、すごくおいしそうだな」

カナンの顔が、少し赤く染まる。

真中さんの弁当は、内容自体は特に変わったことは無いのだが、とにかくデザインが凝っている。人参などの野菜はしっかりと型抜きされており、ウサギや猫といった動物の形になっている。おにぎりは真ん丸になっていて、綺麗に弁当箱へと収まっている。子供っぽい弁当ではあるが、可愛い真中さんにはピッタリだと思う。というかイメージ通りだ。

「その…、よかったら食べますか？」

真中さんが俺に、おにぎりを差し出してきた。

「じゃ、もらおうかな。あ、じゃあ俺のエビフライをやるよ」

「ありがとうございます！」

真中さんの顔に笑顔が広がる。やっぱり可愛い。

アキラはカナンからもらったおにぎりに目を落とす。

これが真中さんの作ったおにぎりか……。真中さんの手作りおにぎり……。

何故だか、妙にドキドキする。

おにぎりの包みを丁寧に分けて、食べる。

「おいしいな。やっぱり真中さんが心を込めて丁寧に作ったからかな？」

「このエビフライも、すごくおいしいです！」

嬉しそうにエビフライを食べている真中さんに、ついつい見とれてしまった。前の学校で一緒だったハナも可愛かったが、真中さんはまた違った魅力を持っている。花に例えるなら、ハナは元気で力強いヒマワリ、真中さんは可憐なフリージアといったところだろうか？ おにぎりを持ったまま真中さんに見とれていると、不意に、大きな風が吹いた。

『アルステミア』は制服の着用を義務付けられた学園であり、また真中さんは女子であるため当然制服はスカートであり……。

カナンのスカートが、ふわりと持ち上がった。

「……………！」

「きゃっ！」

カナンは持っていた弁当箱を膝に載せ、スカートを押さえた。

アキラは、偶然見てしまったカナンの下着に動揺し、ふっとカナンから目を逸らす。

どうしよう？ 心臓がかなりドキドキしている。なかなか収まりそうに無い。

そんなアキラをカナンが不思議そうに見つめ、やがて何かに気付いた様に、アキラの顔へと手を伸ばした。

カナンの手が、アキラの口元に触れる。

「え……！ ま、真中さん！？」

「崎守君……」

カナンはアキラの顔から手を下げ、

「ご飯粒が、付いてましたよ」

笑顔でアキラに、そのご飯粒を見せる。

「え、あっ！ありがとう、真中さん！」

「どうしましたまして」

真中さんは、俺に向かって微笑みかける。俺も、微笑み返した。下着を見られた事は特に気にしていない様だ。

2人は残っていた弁当を全て綺麗にたいらげ、弁当箱を片付ける。

「晴れてたら、もっと良い眺めなんだよな？」

「はい。ここからだ、広場の緑と、町の建物と、青空を同時に見渡せるので、人気の場所なんですよ」

「そっか。じゃ、また今度晴れた時に、二人で見に来ような」

「は、はい！」

カナンは少し慌てた様に答えた。



崎守君には言っていないけど、ここは生徒の人気スポットであり、デートスポットでもある。

本当はこの段差も、恋人同士が肩を並べて景色を見る場所。だから、本来は友達になったばかりの崎守君と座るような場所ではない。

でも、崎守君となら別に良いかなっていう気になってくる。

だって崎守君は優しいし、面白いし、かっこよくって…。

私は…。



チャイムが鳴った。あと数分で授業が始まる。

「じゃ、戻るか」

アキラは立ち上がり、それに続いてカナンも立ち上がる。

「次は数学か……。苦手なんだよな、俺」

魔法を扱うには、魔力や呪文だけでなく、数学などの知識も必要になってくる。例えば、今自分が魔法を使うのに適当な魔力量を計算する事で、無駄な魔力消費を抑える事が出来る。またこれにより、より高度な魔法を扱う事も可能になる。魔法を使う人にとって、数学は必要不可欠な科目となっている。

「分からない、ところは、私が教えてあげますよ」

「本当？ありがとな。じゃ、今度頼む」

「任せてください。私、数学は、得意なんです」

その後も様々な会話をしながら、2人は教室へ帰った。

「さてと。数学、頑張るか！」

P10 学園の校長室

数学の授業が終わった。普段は苦痛にしか感じないこの授業も、今日はどこか楽しく感じた。

別に授業の雰囲気自体は普段とさほど変わらないのだが、やはりこれは昼の真中さんとの事が原因なのだろうか？

その後、一つ授業を終え、HRの時間になった。

「崎守！そろそろこのクラスにも慣れてきたか？」

「まあまあ慣れてきました」

「そうか、それは良かった」

俺のクラス担任の羽雪 ワタル（はゆきわたる）先生である。髪は短く全体的に上へ跳ね上がっていて、名前も性格も男っぽい、これでも性別的には女となっている。バスケ部の顧問もしていて、何気にバスケ部内では最強であり、「ワタル先生が生徒なら良かったのに」と全校生徒に悔やまれているらしい。

「さて、崎守がこの学園に転校してから今日で2日目になる。まだあまりこの学園のことを知らないだろうから皆、いろいろ教えてやれよ。まずは…、そうだな。とりあえず明日の金曜日のことを教えてやれ」

「明日の金曜日に何かあるんですか？今月の予定表は確認しましたが明日は特に何も無かったと思うんですが…」

「それはクラスメイトから聞いてくれ」

一体明日に何があるというのだろうか？よく分からない。後で真中さんに聞いてみよう。

「今日は特に連絡も無いしこれで解散だ。皆気をつけて帰れよ」

号令をして、生徒は自由に歩き出した。さっさと帰ろうとする人や友達同士で寄り道の相談をしている人まで様々だ。

俺はまっすぐ、真中さんの席へ向かった。

「真中さん」

呼ぶと、カナンは体を一瞬ビクッと震わせ、アキラの方を向いた。

「さ、崎守君…」

「聞きたいことがあるんだけど良いか？」

「は、はい。何、ですか？」

「明日の金曜日って何かあるのか？ 予定表には特に何も書いてなかったけど」

「あ、それは多分、フリータイムのことだと、思います」
「フリータイム？」

「毎週火曜日と金曜日には、フリータイムが、あって、その日の昼食は、外で食べても、良いことに、なっているんです」

「へえ。じゃあ火曜日、最初に真中さんに会った時もフリータイムだったのか？」

「はい、そうです」

なるほど。真中さんに会ったのは火曜日の昼頃だったからな。

「明日のフリータイムにどこか行く予定はあるか？」

「いえ、明日は特に無いです」

「じゃ、明日は俺に付き合ってもらっても良いか？」

「はい、あの…」

「ん？ どうした？」

何か予定でもあったのだろうか？

「明日は、その、ふ、ふふふ…」

「ふ？」

「二人だけです、か？」

「まあそうだと思うけど。もしかして二人だけは嫌か？」

やはり会ったばかりの転校生と二人だけで出かけるのには抵抗があるのだろうか？ 少しショックだがまあ仕方が無いだろう。

「いえ、そうじゃなくて、あの…」

カナンは顔を真っ赤にして言った。

「むしろ、二人っきりの方が、良い、で…す…」

「へ？」

「い、嫌、ですか？」

「いや、別にそういう訳じゃ……。んじゃ、明日は二人で行くつてことで良いか？」

「はい、お願い、します」

二人つきりの方が良い……。か。

なるほど。真中さんは人と関わるのが苦手みたいだからな。いくらクラスメイトだからといってそう大人数でいることには抵抗があるのだろう。

真中さんにはもっとよく人と接してもらいたいが、いきなりは難しいだろうし、ゆっくりと人に慣れていけば良いのか。

「あの、それで、これから……」

「迷惑じゃなければ、また学園内を案内してもらっても良いか？」
カナンは蔓延の笑みで頷いた。

「はい、喜んで！」

「そういえば、屋上の庭園は？ 昼に行った時には何も無かったけど」
「この学園の屋上は、二カ所に分かれていて、庭園があるのは、もう一つの方なんです」

「まだ入れないのか？」

「はい。さっき確認しましたが、やっぱりまだ無理でした」
そうか。仕方が無い。しばらく待つしかないか。どうせ数週間あれば終わるだろう。

「さて、それじゃあと行って無い場所は……」

広場やカフェなど、生徒に人気のある場所はほとんど見てきた。とすると、あとは何処があるだろうか。

「それじゃ、校長室に行きませんか？ まだ、会って無いですよね？」
そういえば、入学手続きやら何やらは全て親がやっていたので、この学園の校長先生にはまだ会っていなかった。式典など、校長先生が出てくるイベントは無かったので、実際、この学園の校長先生がどんな人なのかは知らない。

「ああ。じゃ、行くか」

「はい。あ、校長室は一階にあるので、これから降りますね」

やっと一階に着いた。

相変わらずこの階段はキツイ。これにもこれから慣れていけないといけないな。

「こっちです」

真中さんの後を着いていく。まだ学園内の地図を覚えていないので、迷ったりしたら大変だ。

「次はこの角を曲がって…」

俺がこの学園に入って二日目か。あっという間だったな。

そういえば、その二日間の放課後は常に真中さんと一緒にいるな。転校二日目にして毎日女子と二人つきりって、結構凄い事じゃないか？

「ここで道が二本に分かれています、校長室に行く時は右に曲がって下さい」

「左には何があるんだ？」

「理科室があります」

理科室か。

いくら魔法が便利だからといって、科学や化学を蔑ろにしてはいけない。

普段使用している電化製品やその他は、科学や化学を使用したものがほとんどだからである。

「次にこのドアを通って…」

「にしても遠いな…」

「校長室は学園内の、校門から見て、一番奥にあるんです」

だからといって、いくらなんでも遠すぎる。歩き始めてもう二十分位になる。校舎内しか移動していないのにこんなにかかるなんて、驚きだ。

「校長室に行く時には、皆こんなに歩いていけないのか

？」

生徒も教師も校長先生も大変だな。

「いえ、学園内の様々な所には、移動用のゲートが設置されているんです。なので、学園内の移動は、遠くまで行く時は皆、それで移動しています」

「なら俺達もそうした方が良かったんじゃないか？」

「でも、あれは行き先のイメージをある程度持っていないと移動できないんです。とりあえず一度は歩いて移動しておかないと、これから先、崎守君だけで移動する時に不便だと思います」

「そっか。まあ、俺も真中さんと一緒にいるのは楽しいから良いけどな」

「ほ、本当ですか！」

「ああ」

カナンは顔を赤くし、俯いた。

「あ、もうすぐです」

照れを隠すように言った。

だんだんと、校長室の扉が近づいてくる。

「凄い立派な扉だな」

扉は木製で、どこことなく威厳が漂っている。

校長室の前へ着いた。

そして俺は、その扉を開いた。

「よく来ました、アキラ君」

P11 会長の再来

俺達に話しかけてきたのは、若い女性だった。眼鏡がよく似合う知的な感じの人だ。

「えっと、もしかしてあなたが…」

「はい。私が『アルステミア』の学園長、煌月エリカ（きらづきえりか）です。呼び方はご自由にどうぞ」

「それじゃ、煌月先生と呼ばせてもらいます。煌月先生、会いに来るのが遅れてすいませんでした。すっかり忘れていました」
とりあえず正直に言うておく。

「いえ、直接会ったことが無かったのですから、忘れても仕方ありませんよ」

笑顔で許してくれた。良かった。

「おや？真中さん。お久しぶりです」

「こ、こちらこそ。お久し、ぶり、です」

「ふふっ。また緊張していますね。はい、深呼吸」

カナンは大きく深呼吸した。

そういえば、煌月先生と真中さんの会話、前に俺も真中さんとしたことがあるよな。

「どうです？落ち着きましたか？」

「はい。もう大丈夫、です」

「ところで…」

エリカ先生は少し、いたずらっぽい笑みを浮かべながら言った。

「アキラ君と一緒にいるということは、二人は恋人同士ということですか？」

カナンの顔が一気に真っ赤になる。

「ち、違います！崎守君とは、その、と、友達で！こ、こ、恋人という訳じゃ…」

必死に否定をする真中さん。確かに恋人同士では無いにしても、そ

ここまで必死に否定されると少し悲しい。と同時に、悪戯心も湧いてきた。

「はい。恋人同士です」

「さ、崎守君！」

驚いた様に俺の方を見た。

「ふふっ。分かっていますよ。友達ですね。まだファミリーネームで呼びあっている様ですしね」

エリカ先生が子供の様な無垢な笑顔で言った。

「まあ、アキラ君は真中さんと恋人同士だと思っていた様ですけどね」

と今度は、俺の方にいたずらっぽい笑みを向ける。

「いや、俺は冗談で言っただけで、別に本気という訳じゃ…！」

「ふふっ、冗談です」

何だ、びっくりした。本気で焦った。

「崎守君！」

真中さんが俺のことを涙目で見ている。顔はまだ真っ赤だ。少し寂しそうな表情で、続けた。

「驚かせないで、下さい…」

「ごめんな」

ちゃんと謝っておく。真中さんを驚かせたのは事実だから。本当に悪いことをした。

「でも、崎守君となら、別に、問題無い気も…」

「ん？何か言ったか？」

「いえ！別に何も！」

何か真中さんが言っていた気がしたが、小さな声だったためよく聞き取れ無かった。

さて、そろそろ学園長室を出て別の所に行こうかな。いろいろ見てみたい場所もあるし。

「あ、じゃあ俺はそろそろ…」

「失礼します」

ノックの音が聞こえ、女生徒が学園長室へ入ってきた。

「学園長。今年の聖花祭の企画書をまとめ終わりました。…ん？」
女生徒が俺の方を見てきた。

あれ？この人、どこか見覚えが…。

「「あーっ！」」

「俺のこと踏み付けた揚句『メイコ様』と呼ばせようとした生徒会長！」

「注意書きも読めずにルールを破り、生徒会長に逆らおうとした無礼生徒！」

「おや、知り合いですか？」

「「全然！知らない人です！何の関係もありません！」」

「矛盾してますよ」

何でここに生徒会長が！？いや、生徒会長だからこそか。

しかし迂闊だった。まさかこんな時に出会ってしまうなんて…！

…さっきの話、聞かれて無いよな？

「それじゃ、あたしはもう行くわ。じゃあね、ラブラブカップル！」
やっぱり聞かれてたっ！

「だから違います！恋人云々のくだりを聞いているのならその後も聞いているでしょう？」

「さあ、何のことかしら？」

こ、こいつは…！

「崎守君、こうなったらもう、こ、恋人同士ということに、しません、か？」

「真中さんまで何言ってるんだよ！」

「ふふっ、青春ねえ！」

「煌月先生まで…！」

何かもう疲れたな…。

俺達は学園長室を後にした。

生徒会長は企画書を提出し軽く説明をしたあと、すぐに出ていった。

というか、あんな性格なのに、生徒会長としての仕事はしっかりこなしてるんだな。意外だ。

「さてと。次はどこに行くか？」

「そうですね……。それじゃ、図書室とか、どうですか？」

図書室か。それほど本も読まないし『アルステミア』に来る前も図書室や図書館、書店などにはあまり行かなかった。なのであまり興味は無いが、とりあえず行ってみるか。

「そうだな。図書室ってどこにあるんだ？」

「二階です」

「二階か……。ってことはまた結構歩かないといけないのか……」

「いえ、学園長室と違い図書室は、本校舎からそれほど遠くにある訳ではないので、今回はゲートを通して行きましょう」

ゲートは学園長室からすぐの所にあった。なるほど。これなら学園長室へ行くのもあまり苦にはならないな。

「少し、待っていて下さい」

カナンはゲートの前へ立ち、杖を構える。ピンク色で桜の花の飾りが付いた、可愛いらしい杖だ。

杖の先をゲートに向けたまま両手を広げ、目を閉じる。そして詠唱を唱えた。

「『大地よ大海よ天空よ、空間を越え時を貫く道をここに開け』」
カナンは目を開いた。

「『ラ・スぺスラズル』！」

まばゆい光がカナン達を包み、ゲート内に幾何学模様が浮かび上がった。

「さ、行きましょう」

カナンはアキラに手を伸ばす。

アキラはその手を握り、ゲート内へ進んだ。

「はい、着きましたよ」

目を開けると、そこは二階の螺旋階段付近だった。

「へえ、こんな所にゲートがあったのか。全然気が付かなかったな」
何か扉があることには気付いていたが、特に気にはしていなかった。

「で、図書室はどこに…」

「あ、あの…」

「ん？」

何やら真中さんが俯いている。いや、俯いているというより俺と真中さんの間を見つめている様だ。

一体何が…。

そこで気が付く。

そういえばゲートに入る時、真中さんが手を伸ばしてきたので俺はそれを握っていた。

だがあれから手を離れた記憶は無い。つまり…。

「あああつ！悪い、真中さん！気付かなかった！やっぱり嫌だったか！？」

急いで手を離す。

「いえ、別に、嫌じゃ無いですよ。でも、気にはしていました、けど…」

嫌じゃ無いとは言っているが、気にしていたということはやはり、本当は嫌だったということなのだろうか？

ああ、俺は何てことを！

「どうしますか？もう一度、繋がりますか？」

そう言い、笑顔で俺を見ってくる。

「いや、そう言われても…」

まさかこれは俺に対する意地悪なのだろうか？学園長室での冗談や手を繋いだことがそんなに嫌なことだったのか？

「あー、俺が悪かった。ごめんな」

「はい？」

とりあえず謝っておこう。そうすれば機嫌も、少しは直るかもしれない。

「じ、じゃ、図書室に行くか！どっちだ？」

「え、あ…、はい。図書室は向こうにあります」

そう言い、カナンは右を指差した。

「よし、行くぞ！」

アキラは少し速歩きで進んだ。そしてそれをカナンが追いかける。

「あ、待って下さい！」

追いかけているが、カナンは自分の手を見て、少し頬を緩めながら言
った。

「崎守君と、手を…」

P12 学園の行事

「着きました」

「ここが図書室か。何て言うか…、広いな」

前通っていた学校の図書室の数倍から数十倍はあるだろう。驚きの広さだ。一体この図書室にはどれほどの本が置いてあるのだろうか？

「それでは、入りましょうか」

扉を開けて、アキラ達は図書室へ入った。

外で見てもかなりの広さと分かったが、中で見るとさらに広く感じる。そして驚きの連続だ。

まず一つ目に、本の多さだ。図書室は二階建ての構造になっていて、そのほとんどのスペースを本棚が占めている。

二つ目に、生徒の多さ。前の学校の図書室と違い、『アルステミア』の図書室はかなりの大人気のようなのだ。

そして三つ目に…。

「あら、ラブラブカップルじゃない。偶然ねえ！」

「せ、生徒会長…。何でここに？」

「何よ。居ちゃ悪いの？」

何故か生徒会長がいる。

「ちょっと調べ物にね」

「調べ物？勉強ですか？」

多分三年生だと思うから、やはり受験勉強か何かだろうか？

「違うわ。生徒会長としての仕事よ。それに…」

悪戯っぽいような、馬鹿にしているような、そんな感じの笑みを浮かべ、

「あたし勉強出来るし」

…は？

まあ確かに、生徒会長をやってる位だし、勉強は出来るだろうけど、は？

こんな性格してるくせして勉強出来るとか、普通にムカつく。

「君は大丈夫なのかなあ？うふふふっ」

こいつ、マジでムカつくっ！

「…まあ、それはそれとして。何読んでるんですか？」

「エロ本」

「はあ！？」

エロ本！？生徒会長が図書室で！？

「冗談よ。君じゃあるまいし、学園内でそんな物読んだりしないわよ。というか、元々そんな物読まないし」

「さ、崎守君が、学園内で、え、え、えっちな本を！？」

「だあっ！俺はそんな物読んでないからなっ！！」

何なんだこの生徒会長は！？俺のイメージを崩すのがそんなに楽しいのか！？

「まあ良いわ。教えてあげる。これよ」

そう言い、読んでいた本を見せてきた。

「…『花図鑑』？」

まさか花について調べていたとは、はつきり言って意外だ。

「この学園には聖花祭っていう行事があつてね。今その飾り付けをどうしようか考えてたところなの」

「聖花祭？」

何だろう？文化祭のようなものだろうか？

とりあえず生徒会長に聞いてみようと思ったが、その前に真中さんが教えてくれた。この生徒会長に聞くのはどちらかというと嫌なので、ありがたい。

「聖花祭は、毎年十月頃に行われる行事で…、そうですね。文化祭と、武闘会を合わせたような、行事です」

「武闘会！？」

まさか戦うのか！？生徒同士が殴り合うのか！？

「うーん…。武闘会っていうか、魔法大会ね。お互いに魔法を使って戦い合うの。トーナメント方式になっていて、最後まで勝ち上が

った人が優勝よ」

「二人一組での、参加になっていて、この大会は『セイントローズ』と呼ばれています」

『セイントローズ』、聖なるバラか。

「あとはまあ、普通の文化祭ね。お店を開いたり出し物をしたり」

「…なるほど」

それはなかなか楽しそうな行事だ。

「その『セイントローズ』って、誰でも参加できるんですか？」

「ええ。生徒でも先生でも、『アルステミア』に通っている人なら誰でも参加できるわ」

参加自由ならば、是非とも記念に参加してみたい。二人一組か…。ならば真中さんが出るか？でも真中さんは嫌がりそうだな。

「参加したいの？」

「いや、しばらく考えてみます」

「そう。分かったわ。参加締切は九月始めだから、遅れないようにね」

まあ、九月までには他にも友達ができているだろうし、それでこういう行事が好きそうな人がいれば参加してみよう。

「そういえば、君達は何をしてるの？デート？」

「ち、違いますよ。学園内を見て回ってるんです」

「ああ、転校してきたばかりだから」

ふっと笑い、カナンに目を向け、アキラに視線を戻す。

「ま、お幸せに！」

「いや、俺達、そんなんじゃないですし…」

「あたしもう帰るわ」

本を持ったまま、扉に向かう。そして扉付近にいる図書委員の生徒に、

「これ借りてくね」

とだけ言い、図書室を出ていこうとした。

「借りる時って、ああやって言うだけでいいのか？」

「いえ、借りる時は、生徒証を見せて借りたことを、登録してからでない？」

そこで生徒会長が俺達の方を振り返り、笑顔で言ってきた。

「だってあたし、生徒会長だもん」

そしてそのまま出ていってしまった。

生徒会長…。

いくら何でも自由過ぎるだろ！？

「んじゃ、そろそろ帰るか」

しばらく図書室を見て回っている内に、いつの間にか下校時刻になっていた。とにかく広いので、一通り見て回るだけでも一苦労だ。

「はい」

「一緒に帰るか？」

「はい！」

下校路。

俺達は二人並んで帰っている。端から見たら俺達はどう見えるのだろうか？

そういえば、昨日は突然男子生徒が絡んできて、真中さんの魔法を喰らって倒れて今日休んでるんだよな。大丈夫かな、あいつ。

ま、そんなことはどうだって良いか。絡んできたのはあいつの方だし。

「俺が転校してきて二日目か…。何か色々ありすぎて、まだ二日しか経ってないってのが嘘みたいだな」

「そうですね。私も、崎守君に会って二日…、いえ、三日でした。三日しか経ってないというのが、嘘みたいです」

二日…。でもこの二日で真中さんとも結構仲良くなれたし、何人かの人とも関わりを持てた。『アルステミア』での生活は楽しいものになりそうだな。

「真中さんの家はこっちだったよな？」

「はい。あ、崎守君の家とは正反対何ですね」

「家まで送って行こうか？」

夜道に女の子一人というのは、何かと危険だろう。

「いえ、大丈夫です。そうすると、崎守君、結構な遠回りになりますし」

「本当に平気か？」

「はい。あの…」

「ん？」

「明日また会いましょうね！」

「ああ。じゃあな」

真中さんは家の方向へ歩いていった。俺は真中さんが見えなくなるまで、真中さんを見守る。

真中さんが見えなくなったので、俺も帰ることにした。ふと、空を見上げる。

「本当に、楽しいな。今の学園生活は…」

そして、昔の苦痛が、頭を過ぎる。

嘲笑う声。

冷たい視線。

その中心でただ立ちすくむだけの、少年。

味方は誰一人いない…。

気が付くと、俺は塀に手をついていた。

息が荒い。

思わず頭を押さえる。

俺は頭を振り、そんな記憶を必死で打ち消す。

今はもう違うんだ。昔とは違う…。

塀に手をつきながら、俺は歩く。

自分がふと名前を口走ったという事を、アキラは気が付かなかった。

「…ハナ…」

P13 三門の頼み

ピピピッ ピピピッ

「ん…、ああ。もう朝か…」

喧しい目覚ましの音を切り、ベッドから起き上がる。

昨日は家に帰り着くなりすぐ寝てしまったために、かなり腹が減っている。

さっと着替えを済ませ、リビングへ降りる。

「あ、アキラ。ご飯はもう出来てるわよ。窓側がアキラの席ね」

「分かってるよ。ありがとう」

席に着き、箸を取る。今日の朝食はご飯と焼き魚と味噌汁の定番メニューか。

うん。やっぱり美味しい。特に魚の焼き加減が絶妙だ。…親の料理をここまで絶賛する高校生ってのも珍しいよな。いつ来るんだろう？ 反抗期…。

「どう？ もう学校には慣れた？」

母さんは向かい側の席に着いた。これがいつものスタイルである。

父さんは今仕事忙しいらしく、毎朝早くに家を出ている。

「ああ。まあまあかな？ 一応友達も出来たし」

「友達？ じゃあ郵便受けに入ってた手紙もその友達からかしら」

「手紙？」

真中さんからかな？ でも昨日は会ってるし今日も会うはずだから、わざわざ手紙にしてまで伝えるようなことがあるとは思えないしな…。

「とりあえず、その手紙もらえるか？」

「はい。勝手に読んだりはしてないからね」

手紙を受け取り、差出人を確認する。

…三門 エイ？ それって確か、一昨日真中さんの魔法を喰らって昨日休んでたあの男子だよな？ あいつが俺に何の用だろう？

封筒を開け、中身を確認する。特に剃刀の刃などといった物は入っていないようだ。入っているのは一枚の手紙だけ。

《一昨日のリベンジだ！お前に決闘を申し込む！細かいことは後で決めるから、絶対に逃げるなよ！！》

け、決闘っ！？

「お、逃げずに来たか。さあ、決闘を始めるぞ！」

うわー、異様なテンションの人がいるよ…。大体、このご時勢に決闘って…。

「いくぜっ！『ファイガン』！」

三門の指先から火の玉が飛んできた。面倒臭いし、適当にあしらっておくか。

「…『フロウレクト』」

目の前に風の反射壁を出現させる。火の玉は反射壁に当たり、三門へ跳ね返った。

「うおおおおおっ！」

命中。三門は倒れた。

ちなみに『ファイガン』はかなり低級の魔法なため当たっても大したダメージは無く、せいぜい小さな火傷しか負わせることは出来ない。

「まったく、またかよ三門の奴…」

「本当懲りないよな」

三門の様子を見てクラスの人はいきなり呆れ顔だ。日常茶飯事なのだろうか？

「あ、崎守君。おはようございます」

「おはよう」

真中さんにあいさつし、自分の席に着く。荷物を整理していると、真中さんが近づいてきた。

「今日はフリータイムの日ですね」

「ああ、そういえばそうか」

すっかり忘れていた。こここのところ、色々あったからな。

「どこか、行きたい所はありますか？」

「いや、特には。まだ来たばかりでよく分からないから、紹介も兼ねて真中さんが決めくれる？」

「分かりました」

笑顔で頷いてくれた。やっぱり笑顔の真中さんっていいな…。

などと思っていると、さっきまで倒れていた三門が俺の席へと近づいてきた。

「おい、崎守…」

「『フロウラス』」

「うおおおおっ！」

三門は風の力により廊下まで吹き飛んだ。が、すぐに起き上がり走り寄ってきた。

「なあ、崎…」

「『フロウラス』」

「うおおおおっ！」

またもや廊下まで吹き飛んだ。

が、すぐに起き上がり走り寄ってきた。

「崎守、俺の話を…」

「『フロウラ…』」

「何か言いたそうだし、話を聞いてあげませんか？」

「あ、ああ。そうだな」

真中さんかそう言うんじゃないかな。仕方が無い。少しだけでも話を聞いてやるか。

「さ、崎守…。今日のフリータイムだが…」

一拍間を置いてから続けた。

「俺も一緒に行かせてくれっ！」

「…は？」

「フリータイムの日に2人以上で出掛けた事が一度も無いんだよ、俺…。な、可哀相だと思わないか!？」

でもそれって自業自得だよな? あんな事ばかりしてたら増えるのは

敵ばかりだし。

「俺達、友達だろ？」

いつから友達になったんだろう？ 今日だって朝一番で決闘申し込んできたし。

「いや、でもな…。真中さんだって…」

「良いですよ。一緒に行きましょう！」

「ほら、こんなに嫌がって…ってマジで!？」

まさか承諾するとは思わなかった。絶対嫌がるものとばかり…。

「でも真中さん、人が多いと緊張して…」

「だからこそです！」

胸の前でガッツポーズを取る。

「人と関わる事に、慣れていかないと…、駄目だと思うんです！だから私…」

一拍置き、決意を込め言った。

「どんなに嫌な人でも、頑張って接します！」

あ、やっぱり嫌なんだ…。

「ありがとう真中！俺、真中の事誤解してた！実は良い奴なんだな！」

「あ、ありがとう、ございます…」

突然褒められたことに照れているのか、真中さんは斜め下を向きながら微かに笑った。

「うおう…。意外とか、可愛いじゃねーか…」

確かに。

「結局三人で行くのか…」

「ま、いいじゃねーか！んじゃ崎守、真中、これからよろしくな！」

「はあ…。何だか面倒な事になったな…」

P14 昼時の無駄な争い

何だかんだで昼時。

これから俺は真中さんといいでに三門と三人で昼食を食べにでかける…。

ハズだったのだが。

「…何で生徒会長がいるんですか」

「だって面白そうじゃない」

さあ出かけようという時に、何故か突然やって来た生徒会長が「君達、あたしも入れてくれない？」などと言ってきた為、更に余計な人が増える羽目となった。

しかし、よりにもよって生徒会長とは…。

「ま、まあ、いいじゃないですか。多い方が、楽しい、ですし」

と真中さんは言っているが、言葉の途切れ具合から人数の多さでイッパイイッパイなのは丸分かりである。

だが真中さんは自分の苦痛をも省みず、人数の多さに慣れようとしているのだ。ならば俺もその気持ちに応えなければなるまい。

俺は渋々、四人ででかける事に同意した。

ちなみに三門は「女子が増える！しかも美少女ばかり！」と飛び上がらんばかりに喜んでいたが、それは俺の気にするところでは無い。

俺達は現在、商店街にいる。俺はまだこの街に詳しくないので、他の三人の意見にただただ耳を傾けている。

特に好き嫌いは無い為安くて美味しい所ならどこでも良いのだが、皆はそうでは無いらしい。

どこへ行くかで、早速討論が始まった。

「あたしは蕎麦が食べたいわ。料理は和の物が一番よね」

「いや、絶対ハンバーガーだろ。安くて早くて美味しい、最高の食べ物だしな」

「わ、私は、イタリアンが…」

時間は無限にある訳では無い。できればさっさと決めてさっさと食べに行きたい。

が、そんな俺の願望を無視するように、生徒会長は蕎麦の魅力について語り始めた。

「いい？最近ではハンバーガーみたいなファーストフードを好む人が増えてきているみたいだけど、栄養とかそういう事を視野に入れて考えてみると、あれは体に良い物だとはとも言えないわ」

そうか。それは分かったから早く決めてくれ。

「ファーストフードの大半には塩分や脂質などが多く含まれているの。そういう物は、確かに体には必要な物ではあるけど、過剰に摂りすぎると体には悪影響しか及ばさないわ」
で、その話はまだ続くのか？いい加減腹が減ってきたんだが。

「たったあれだけの量で異常なまでの塩分とかを摂取してしまうのよ？将来、生活習慣病になる危険性も高まるし、何より太るじゃないの。だからファーストフードはあまり食べない方が良い、とあたしは思うわ。どう？」

いや、どうと言われても…。正直、話が長かったからあまり内容も覚えて無いし。

ぶっちゃけ今の話なんてどうでもよかったのだが、三門はこれに反論を始めた。いいから早くしてくれ。

「黙って聞いてりゃ…。要するに、ただお前が太りたくないってだけだろうが！」

「あたしは先輩で生徒会長なのよ？『お前』じゃなくて『先輩』でしょ？」

「ああもう！『先輩』と呼ばれたいならもっと先輩らしい事をしてから言えよ！大人げ無いんだよ！」

「あら？先輩は何でも後輩の事を優先しないといけないって言うの？むしろ後輩が先輩の言う事を聞くものでしょ？」

「だからその考え方が大人げ無いって言ってるんだよ！」

「ふっ、お子ちゃま…」

「何だと!？」

俺から見れば五十歩百歩だな。というか、もうそんな事はどうでも良いから早く何か食べよう? もう俺の腹も限界だ。

ほら見ろ。真中さんだって会話に入っていけずに困惑しているだろ。というか二人とも、昼食の話はどうした?

「そもそも、言ってる事が年寄り臭いんだよ! 好きな物を食べて何が悪い!」

「その考え方が生活習慣病の元なのよ?」

「今はまだ良いだろ!」

「駄目よ。今の内から考えて正しい生活を送らないと、後で後悔することになるわよ?」

「だあもう! 面倒臭い! いいからハンバーガーを食べようぜ!」

「絶対蕎麦よ。ハンバーガーなんかよりずっと体に良いわ」

しばらく二人の討論を聞いた後、真中さんの元へ近寄り、

「…二人でイタリアンの店に行くか?」

「は、はい。そうします…」

と少し会話をし二人で食べに行くことに決定した。

当然、三門と生徒会長はここに放置する。

俺と真中さんは二人に気付かれないようにそそくさとその場を立ち去った。

何だかんだで二人だけでイタリアンの店に行った俺達は、満腹になって学園へと戻った。

なかなか美味しい店だったな。安かったし、また行くか。

「さてと、次の授業の準備でもするか」

「そうですね」

ちなみに、あの後三門と生徒会長はフリータイムの時間ギリギリまで討論を繰り広げ、何も食べずに帰ってきた。一緒に行く意味があったのか?

何はともあれ、今日も楽しく終われそうだ。

明日明後日は休日か…。何しようかな？

P15 休日の午前中

翌日…。

今日は土曜日。

『アルステミア』では毎週土曜日と日曜日が休日となっており、したがって今日は休日である。

休日になると友人同士で、普段寄り道では行けない遠くまで出かける生徒は少なくない。

が、アキラは転校してきたばかりで友人がまだ少ないため、特に出かける約束はしていない。携帯電話のアドレスも交換していないため誰かを誘うことも出来ないし、当然誰かから誘われることも無い。なので、今アキラはかなり暇を持て余している。

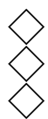
こんな事なら、昨日の内に真中さんや三門を誘ってみるべきだったな…。(生徒会長は論外)

などと悔やみながら、アキラはベッドの上に寝転んで大分飽きてきたゲームを暇つぶしにやっていた。

「…寝るか」

そう呟き、アキラはゲームの電源を切り寝る事にした。

どうせ休日だしな。こういう日位はゆっくり眠っていたいと思うのが学生だろ？



教室の真ん中に、一人の少年が立っていた。その少年の周りにはクラスメイトが取り巻いている。

クラスメイトの目は侮蔑に満ちており、中には少年を嘲る笑う人もいた。

少年は涙目になっている。

「俺は…、何もやってない…」

そう少年が呟くたび、少年には無数の誹謗中傷が浴びせられた。

「何も知らない…。俺は関係無い…」

少年は襟首を掴まれ、また誹謗中傷を浴びせられた。

少年の目には涙が浮かんでいる。が、少年はその涙を零さない。零さないようにしていた。

泣けば、また誹謗中傷を浴びせられる。

逃げ出したい。

逃げ出せない。

もう嫌だ。

俺は知らない。俺は何もやってない。

目が霞んできた。視界がぼやけてよく見えない。が、すぐに視界は晴れてくる。

少年は涙を流した。

少年はそのままその場に泣き崩れた。

無数の侮蔑の目を浴びながら…。



「アキラ、ご飯よー」

その声でアキラは跳び起きた。

時計を確認すると、針は11時30分を指していた。確か寝たのが8時位だったから、どうやら3時間近く眠っていたようだ。

適当に髪を整え、アキラはリビングへ降りていった。

「今日の昼食は焼き鮭とおみそ汁とご飯よ」

「朝食みたいなラインナップだな」

「確かに本当はこれ、朝食のハズだったんだけど、アキラは朝食を食べに来ないし勿体ないから残しておいたの」

朝は起きて少しゲームをやった後すぐ寝てしまったため、そういえば確かに朝食を食べていなかった。

アキラは自分の席に着き、箸を取る。

「いただきます」

ゆっくりと料理を口へ運ぶ。やはり美味い。

一応言っておくが、俺はマザコンでは無い。だから勿論、外では母さんの料理についてはあまり話さない。だがこれでもかなり自制している方なのだ。俺の事をマザコンとか思ったそのお前。今度一度、俺の母さんの料理を食べてみてくれ。きっと周りに自慢したくなるだろうからな。

「あ、そうだ。アキラに手紙が来てたわよ」

「また？誰から？」

まさか三門か？昨日の決闘に負けたからリベンジとか？

「差出人は…、真中 カナン。女の子ね。彼女？」

「な、違っ……………」

「転校したてでもう彼女ができるなんて、アキラもなかなか隅に置けないわねえ」

「だから違うって…！」

「分かった分かった。はい、手紙。勿論まだ開けてないわよ」

「あ、ありがとう…」

差出人は、確かに真中さんだ。一体何の用だろう？

「…ん？」

よく見ると、この手紙には切手が貼られていない。直接家のポストに入れられたもののようなのだ。

どうせ来たのなら寄っていけばよかったのにな。

「でもアキラ。携帯を持ってるのに、メールでやりとりしないの？」

「ああ、まだ誰ともアドレスを交換してなかったからな」

封筒を開けると、中には一枚の便箋だけが入っていた。

母さんもいるので、手紙の内容を見られない角度で便箋を持つ。まあ、母さんが他人の手紙を盗み見る事はまず無いのだが、念の為だ。可愛いクマの絵が描かれた便箋には、短く『お昼に駅前で待ってます』とだけ書かれていた。

一体何の用だろうか？

とりあえず今日は何の予定も無いことだし、行ってみる事にしよう。
お昼って事は12時位でいいんだよね？

手紙はメールと違い、温かみはあるのだがこういう点では不便だ。
メールのありがたみがよく分かる。

「母さん。俺後で出かけるから」

「デート？」

「いや違うって！多分…」

が、若干は期待してしまう。

何にしても、急いだ方がよさそうだ。家から駅までは近いので安心
だが、それでも早くするに越した事は無い。

残り少ない昼食を食べ終え、部屋に戻り支度を済ませる。

「よし、じゃ、行くか」

期待を胸に抱きながら、アキラは家を出た。

駅が見えてきた。時間は12時少し前。間に合ったようだ。多分。
さて、真中さんはいるかな？

「あ、崎守君〜！こっちです！」

P16 真中の呼び出し

「!？」

時が、止まった気がした。

アキラの視線は真っすぐカナンの事だけを見ている。何故か視線を外す事ができない。今のアキラの感情は、そう、例えば美術館で絵画に見取れている様な。例えば有名なケーキ屋の凝った芸術的なケーキを見ている様な。そんな感じだ。目が、心が、その称賛すべき対象物に惹かれているのだ。

つまり…………。

真中さんが、あまりに可愛すぎてどうしようもない感じなのだ！

真中さんの服装は薄桃色の花柄ワンピースに空色のふわふわとしたブルゾン、茶色いブーツ、桜の髪飾りと、いかにも真中さんらしい可愛くふわふわとしたものになっている。春とはいえまだ少し肌寒いので、暖かそうな服装がベストなのだ。

「お待たせ。えと、待ち合わせの時間って12時で合ってたよな？」

「はい。そのつもり、でしたけど…、時間、書いてませんでしたか？」

「いや、ただ昼に集合とだけ…」

「ああ、ごめんなさい！じゃあ書き忘れてました！」

「だ、大丈夫だからさ…」

心の底から頭を下げてきたので、俺は慌てて戻してもらう。周りの視線も痛いし、何よりそんな事で真中さんに頭を下げさせるのは悪いからな。

「それで、今日はどうしたんだ？」

そう聞くと、真中さんは若干俯きながら、もじもじと答えた。

「そ、その…。折角の休み、というより、崎守君が転校してきてから、初めての休みだったので、えと、折角なので、どこかに一緒に、で、出かけたいな…、と思いましたが…。だから…、その…」

「分かった。じゃあ行きたい所とかあるか？真中さんの好きな所とか」

家の近所ならばともかく、真中さんに行きそうな所となると、丸つきり分からなくなるため、真中さんの意見を参考にしなくてはどうにもならない。早くこの辺りにも慣れないとな。

真中さんはホッと一息つき、口元に指を付け考える。すぐに思い付いたようで、笑顔で、かつ若干控え目に提案した。

「なら、商店街の方に、行ってみませんか？」

「そうだな。前に一度行ったけど、大きすぎてよく分からなかったし、軽く案内してもらえると嬉しいかな」

「分かりました！それじゃあ頑張って案内しますね！」

「よろしくな」

「はい！」

「やっぱ大きいな、ここの商店街は…」

「世界的に見ても、割と大きい方なんですよ」

思えば、真中さんと会ったのもここに来る途中だった。今持っているロッドもここで買った物だし、たった数日の間で商店街とは色々に関わりがあった。もしこの商店街が無ければ、俺は今とは全く違った生活を送っていたのかもしれないな。

「とりあえず、色々と適当に回ってみますか？」

「そうだな」

アキラとカナンは、まずすぐ近くにあった魔法具屋へ行く事にした。前にアキラがロッドを買った店だ。

店内は相変わらずの賑わいで、お目当ての物を探すだけでも一苦労だろう。アキラ達は特にお目当ての物も無いのであまり関係無いのだが。

「あ、見てくださいあれ」

真中さんの指差す先に目をやる。どうやらそこは洋服のコーナーのようだ。

ここで言う洋服というのは普段着のような物ではなく、正式な魔法行事に着るような洋服だ。正式な魔法行事には聖花祭なども含まれる。

洋服のコーナーまで行くと、すぐに真中さんは展示してあった洋服を指差す。

「これです。可愛いと思いませんか……？」

若干不安な表情でアキラを見る。

が、そんな不安など感じる必要は無かった。何故ならそれはアキラ自身も納得行く程に可愛い洋服だったからだ。

その洋服は黒を基調にしたローブで、裾にはふわふわとした飾りが付いている。襟には花の飾り。普段着と比べるとかなり地味に見えるが、ローブの中ではかなり可愛い部類に入るだろう。

「俺も可愛いと思うよ。真中にも似合いそうだし良いんじゃないかな？」

「で、ですよね!!」

ホッとした顔になる。

「えと、値段は……。……!!？」

俺も思わず息を呑む。その値段は、俺達のような学生にはとても手を出せないような値段だったからだ。

「ざ、残念ですけど、これは諦めます……」

さっきとは打って変わって残念そうな顔になる。

「……（ちらっ）」

「いや、そんな目で見られても……」

「ですよね……。分かりました、ならこれは一生懸命、お金を貯めて買うことにします！聖花祭までまだありますし、その頃にはきっとこの洋服も、買えると思います！」

「頑張れよ、真中さん！」

「頑張ります!!」

2人は魔法具屋を後にし、他の場所へ行くことにした。が、あまりお金を使ってしまうと色々と危うくなるので商店街を少し行った先

にある広場へ向かった。

「綺麗な場所だな……」

アルステミアにある広場も広々として綺麗だったが、ここも負けず劣らず。街中とは思えない程広々としたそこでは子供達が思い思いの遊びをしている。鬼ごっこをしている子達やボール遊びをしている子達、木陰でスケッチしている子までいる。この広場は自然溢れる憩いの場なのだ。

しばらく歩いた後、木陰にベンチを見つけたのでそこに腰を下ろした。ふと空を見上げる。雲ひとつ無い爽やかな空が広がっていた。空を見上げたまま話しかける。

「なあ、真中さん」

「何ですか？」

「セイントローズってあるだろ？」

目線を真中さんに向ける。

「あれ、一緒に出場しないか？記念になるし、きっと俺と真中さんなら良い所まで……」

「すみません……」

真中さんはふっと俯き呟くように続けた。

「私は、あまり目立つ行事には、出たく、ないんです。だから……、本当にすみません」

「だよな……」

再び目線を空に戻す。

「そう言うと思った。んじゃ三門辺りを誘ってみるよ」

「本当にすみません」

「謝るなよ。ただの俺のわがままなんだし。ただ出るなら折角だし真中さんと……、って思っただけだしさ」

アキラはベンチから腰を上げ、カナンに目を向け微笑む。

「そろそろ行くか？まだ色々と商店街を案内してもらいたいし」

「はい、分かりました！」

真中さんの屈託の無い笑顔を見ると、なんだか胸に暖かいもの

を感じた。

それからしばらく真中さんと商店街をお金をかけ過ぎずに見て周り、最初に待ち合わせた駅前に着いた。

「今日はありがとうございます」

「俺の方こそ。案内してもらえて本当に助かったよ」

そろそろ日も暮れてきたし、急がないと家に着く前にあたりが真っ暗になってしまいかもしれない。俺は良いとして真中さんは一人だと危ないだろう。本当は送っていけたら良かったのだが家の方向的にそれも難しい。

「それじゃ、また学校で……」

「あ、待ってください。その……」

カナンはすつと携帯電話を取り出し顔を真っ赤にしながら言った。

「メールアドレスを、交換しません……、か？」

俺も携帯電話を取り出し、微笑む。

「喜んで！」

P17 真中の危機

日曜日――。

これといってする事の無かったアキラは、一日中ゴロゴロと寝転がって過ごしていた。

こうしていると昨日真中さんと出かけた事が夢のように思える。でも携帯電話には真中さんのアドレスが登録してあるし、夢じゃないんだよね？

まだ引越して来てから数日しか経っていないにも関わらずもう何人も友達ができたし、きっとこれからも増えていくんだろう。とすると、『アルステミア』のフォルダにはどれ程のアドレスを登録できるとのだろうか？

前の学校ではほとんど友達がいなかったため、アキラの携帯電話にはアドレスの登録数が少ない。だからこそ、カナンという『友達』のアドレスを登録した事実が嬉しくて堪らないのだ。

その日の夜、カナンから一通のメールが届いた。アキラが引越して来て初めてのメールだ。

『こんばんは。崎守君のおかげで昨日はとても楽しい一日になりました。明日また学園で会いましょう。』

P・S・

少し面倒な事に巻き込まれてしまいました。もしよければ力を貸してください。』

面倒な事？一体真中さんの身に何が？

よく分からないが、困っているのは確からしい。明日会った時に聞いてみよう。

そして次の日。

「あ、崎守君。おはようございます」

自分の席に着こうとしたところでカナンがアキラの元へやって来た。

一昨日の私服姿も可愛かったけど制服姿も良い。

「あはよう。ところで、面倒な事って何があったんだ？」

今は何よりもその事が気になる。

カナンはどう説明したものかと一瞬困った顔をし、それから数秒後に話がまとまったのかその出来事を説口にした。

「実は、崎守君と出かけた日の帰り、だったんですが――」



アキラと2人きりで出かける事が出来たカナンは、ぽかぽかと胸を暖めながら帰路を歩いていた。

崎守君とアドレスも交換したし、これで家にいても崎守君と会話が出来るなあ。嬉しいなあ。家に帰ったら早速メールしてみようかなあ。などと胸を躍らせ喜びに身を任せながらぐるぐると体を回す。

普段のカナンを知っている者が見たらさぞかし異様に見えるだろう。そう。浮かれていたのだ。だからこそ気づかなかったのだろう。

前から怖そうなお兄さんが歩いてきている事に。

体に重い衝撃。カナンはそのまま後ろに倒れてしまった。

痛みに細まる目を何とか開け見ると、目の前には『アルステミア』の制服を着た男性が立っていた。見覚えが無いので多分上級生だろう。右手には何故か金属バット。よく見ると着ている制服も所々改造が施されている。これが俗に言う不良という奴だろうか？ 一体いつの時代から来たのかと思うずつつ込みたくなる程に古典的かつ典型的な不良スタイルである。

ここまで不良すぎる格好をしているという事はつまり、次に来る言葉はきつと……。

「あああ、痛え！ こりゃ骨でも折れたか？ どうしてくれんだおい！」
やはり来た。まさか本当にこんな事を言える人がいるとは、驚きだ。

「ん？ 女か……。なかなか可愛いじゃねえか。なら分かってるよな？」

そう言い、カナンの腕を強く掴んできた。

「痛っ！」

掴まれた腕も痛い、足もヒリヒリ痛い。どこか擦りむいたのかもしれない。

「抵抗するんじゃないぞ？」

ああ、どうしよう。このままだと何をされるか……、いや、むしろ何をするか分かったもんじゃない。

不良の手がカナンの胸に触れるか否かというところで、唐突に不良の手が、体が、カナンから遠ざかる。というより吹っ飛んでいった。すぐに起き上がりガンを飛ばす不良。

「てめえ、何しやる！」

が、その表情に恐怖の色が浮かんだ。その不良の目線の先にはカナンが……。

第二人格のカナンが睨みを聞かせて立っていた。

「はあ？ あんたこそ何？ そんなに死にたい？」

「ぐっ……、てめえ！」

不良は持っていた金属バットを振り回し迫ってくる。

普通の人から見ればそれは恐ろしく恐怖の対象になりえるもの。が、そんな事はカナンには些細な事に過ぎなかった。

「まったく面倒臭い」

眩き、鞆からロッドを取り出す。

「『ビックバラス』」

大きな爆発が起こり、その先には体の至る所に火傷を負った不良が転がっていた。

なんとか意識を保っていた不良は必死に顔を上げ、叫ぶ。

「てめえ、ただで済むと思うなよ？ 俺には強い兄貴がついてるんだ！ 兄貴の手にかかればてめえなんて……」

「うるさい」

容赦なく不良の頭に振り下ろされた足は、不良の意識を奪うのに十分なものだった。



「と、いう事がありました……。今日私の下駄箱に、果たし状が入っていたんです」

「果たし状？」

ふと三門の顔が頭をよぎる。まあ関係は無いだろうが。

「にしても、よくその『女』が真中さんだと分かったよな」

「まあ有名ですから……」

確かに三門と始めてあった時の、あの三門の怯えようは尋常じゃなかった。二重人格で強力な魔法を扱う女生徒……。有名になる訳だ。「その果たし状に書いてあった日程が、今日の放課後、広場という事で……」

「放課後の広場って人が多いよな、大丈夫か？」

「ですから、崎守君に手伝ってもらいたいです。お願いしても、良いですか？」

上目遣いで尋ねてくる真中さん。

これは断れないよな……。

「分かった。任せろ真中さん！他の人に危害が及ばないように、もし真中さんが危なくなったら俺が助けるからな！」

「はい！ありがとうございます！」

それから普通に生活し、ついに放課後がやってきた。

P18 豪本の果たし状

「おう、よく逃げずに来た！わしこそが学園一の強力ごうりき、豪本エンジン（ごうもとえんじ）じゃあ！！」

全く、いつの時代のヤクザだよ……。

目の前にいる2人の不良らしき人物。一人は真中さんが言っていた改造制服と金属バットの前時代的不良。そしてもう一人が、多分その不良の言っていた兄貴。今名乗りを上げた方である。服装はやはり改造制服、右手には金属バット、左手にはメリケンサック。そして一人称が『わし』。まだこんな前時代の遺産が実存していたのか。「どうだ！兄貴が来たからには千人力！てめえなんざイチコロよ！」いるよな、こういう強い奴と一緒にいると異様に気が強くなる奴。いかにも小心者らしい。

「崎守君、周りをお願いします」

「了解。真中さんもやりすぎないようにな」

アキラは数歩下がり、ロッドを構える。いつ周りに攻撃が飛んできても相殺できるように気を研ぎ澄ませる。

「おう、この前の弟分の仇討ちじゃあ！『アルムメル』！」

……？豪本が何やら魔法を使ったようだが、傍目からは何かが起こったようには見えない。そもそも手に持っているのはロッドでなく金属バットだ。

ハッターか？

「『フリズラス』！」

真中さんのロッドの先から氷のつぶてが飛ぶ。魔法でガードしていない相手ならこれ一発で気を失わせる程度にはダメージを与えることが出来るハズだ。

氷のつぶては豪本の目の前まで飛んでいき爆発。豪本もなんとか金属バットで防ごうとしたようだが真中さんの魔法の前には通用せず――。

いや、違う。豪本は無傷で立っている！？あの爆発で無傷？生身の体でそんな事が出来る訳がない。

まさか……。

氷のつぶては爆発したのではなくあの金属バット一振りで砕かれたのか？そんな馬鹿な！たかが金属バット一本だぞ！？

真中さんも驚いているようで、目を見開き立ち尽くしている。

「ふはは！それで終いか？なら次はわしの番じゃあ！！」

豪本は金属バットを振り上げ、そのまま勢い良く振り下ろす！

辺りが振動し立っている事が出来ない。アキラとカナンはその場に倒れる。さっきまで周囲にいた生徒達は不穏な気配を察したようで、大方の人は既に避難した後のようだ。

重そうな見かけとは裏腹に豪本は機敏に動き、真中さんの元へ走り寄る。マズイ！

金属バットを振り上げ、カナン目掛けて振り下ろす！

「噂など所詮噂に過ぎぬか……。ちよろいもんじゃあ！！」

「あ、兄貴！気を付けてください！」

「ん？」

寸でのところで金属バットを止め、一步後退する。

「そうやあこいつは二重人格者、もう一つの人格が危険じゃったか？じゃが……」

再び金属バットを振り上げる。その顔には恐怖の色など一切無く、ただ戦いを楽しんでいるように見えた。

「その人格が出てくる前に倒しゃ問題なしじゃあ！！」

「『フロウラス』！」

カナンに当たる直前で、金属バットはあっけなく吹っ飛んだ。

真中さんが傷付くところは見たくない。もう周囲に人はいないんだ。そろそろこの不良達を倒しても良いだろ？

「真中さんに手を出すな！『フロウラス』！」

今度はエンジの体が宙に舞い、後方に吹っ飛んだ。

エンジはさっきと打って変わって憎悪の表情を浮かべる。

「てめえ……。ただでは済まさねえぞ」

「いくら俺に攻撃しようと構わないけどな……」

普段の温和な顔から想像も付かないような表情をした。それは怒りを一切隠さない、ありのままの『怒り』の顔だ。

「真中さんに怪我でもさせてみる、お前らは俺がぶちのめす!!」

「『フロウメル』!」

自分にかけて風の魔法でふわりと宙を舞い、エンジンの方へ飛ぶ。

いつの間にやら子分が金属バットを回収していた様で、エンジの手には先ほどと変わらず金属バットが握られている。

「なるほどそういう気か……。ならわしも手加減はなしじゃあ!!」

『アルムラス』!」

前へ鋭く突き出した金属バットから衝撃波が放たれる。そうか、あの金属バットはただの武器でなくロッドだったのか。なんとか回避するが、体勢が崩れてしまった。

無論エンジンもその隙を逃すハズも無く。

「『アムルラス』!」

衝撃波に『フロウメル』もろとも吹っ飛ばされる。

地面に強く叩き付けられたものの『フロウメル』のおかげでダメージは少ない。

「『フロウレイ』!」

辺りに強い風が吹き始める。

「ふん、何をしようとしているか分からんが、先にてめえを潰せば済む話じゃあ!!」『アルム――』

エンジンが呪文を言い切る前に、エンジは後方より吹いた突風に吹き飛ばされた。

『フロウレイ』は魔法使用者の思い通りの場所で1度だけ突風を起こす事の出来る魔法であり、つまり奇襲を仕掛ける事の出来る魔法である。

「『アルムメル』!」

が、地面に叩きつけられる直前に唱えた『アルムメル』の効果で一

時的に筋力を増大させたエンジは難なく体勢を立て直し着地する。

「舐めやがって……。『ファイ・アルムメル』!!!」

金属バットが勢い良く燃え上がる。金属なのに溶けたり焦げたりしない事から魔法による属性付加だと分かる。

「これでめえも終い——」

「はい、終了。『ロズ・ウィプル』」

燃える金属バットを手に取りかかってこよとしたエンジは、突如現れたロープに縛られ身動きが取れなくなりその場に倒れこんだ。その時手から落ちた燃える金属バットは魔力を失いたただの金属バットへと戻っていた。

啞然とするアキラの横を平然と歩く人物。どうやら生徒のようだ。その女生徒は真中さんの元へ歩み寄り、頬をそっと撫でた。

「大丈夫だった？ 怪我は無い？」

「え？ あ、あ、大丈夫、です……」

自分の魔法を呆気なく砕かれたり金属バットで殴られそうになったりした真中さんはしばらくボーっとしていたが、その女生徒に声をかけられハツとなったようだ。

あの女生徒には見覚えがある。あれは……。

「生徒会長……。何でいるんですか？」

「助けてあげたのにその言い方は無いでしょ……。とにかく、校内で無許可の戦闘は禁止されているの。分かった？ これは校則違反よ？」

「でも仕掛けてきたのはあっちで……」

「とりあえずあの2人はあたしが校長室に連れて行くから、そっちの方は任せて。君達は後で反省文を提出する事。分かった？」

メイコのロッドの先から伸びるロープは不良二人を縛っている。そのロープをひよいと手繰り寄せ、メイコは不良を連れ去っていった。アキラはカナンの元へ走り寄る。

「真中さん、無事か？」

「はい、大丈夫です。その……」

カナンは俯きがちに言った。

「あ、ありがとうございます。怖くて、魔法も効かなくて、びっくりにしてしまつて。崎守君がいなかったら、私……」

「真中さん……」

アキラは涙をこぼすカナンを、そつと抱きしめた。カナンが泣き止むまでの間、ずっと……。

P19 二人の思い



「それで……」

校長室の真ん中には紫のロープで縛られた不良2人が寝転んでいる。そのロープを辿った先には1本のロッドとそれを握る笑顔の女生徒。その光景に『アルステミア』の学園長である煌月エリカは困り、眼鏡を指で押し上げ目じりを揉んでいる。

「どういう用件でしょう？」

エリカ先生の戸惑いを知ってか知らずか、生徒会長の早宮メイコは不良を指差し自信満々に答えた。

「校則違反者を連れてきました」

「それは大方分かるのですが……」

視線は当然、縛られ寝かせられている2人に向かう。

「その校則違反者をマニアックに縛って連れて来た理由が分かりません」

そう、2人の縛られ方はその手の人がされると喜ぶような独特の縛り方なのである。だが2人には生憎そのような趣味が無いようで、ただ苦痛と屈辱に顔を歪めている。

2人の助けを綱うな目がチクリと痛い。

「まあ2人はこのままで良いとして、これからどうするつもりですか？」

この際2人の涙目は見なかった事にしよう。

「あたしが責任を持って調教……、もとい教育しますのでご安心下さい」

「早宮さんがそう言うのなら……」

良くない気がするが、もうどうでもよくなってきた。

それよりもアキラ君と真中さんが心配だ。アキラ君は転校して来た

ばかりで戸惑いもあるだろうし、真中さんはメンタル面で若干弱いところがある。後で会いに行ってみよう。

「では、あたしはこれで。失礼しました」

「あ、その……」

2人を縛ったまま引きずり退室しようとするメイコを引きとめる。

「……ほどほどにして下さいね？」

「……失礼しました」

返事が無かったが、本当に大丈夫だろうか？まあ考えていても仕方が無い。今は早宮さんを信じる事にしよう。

数時間後、メイコは不良2人から『姉御』と呼ばれる存在になっていた。



エンジに絡まれた次の日、カナンは登校してこなかった。メールも昨日から何通か送ってみたが返事は来ない。ワタル先生の話によると欠席の理由は「精神的に不安定になっているため」らしい。二重人格のため医者に通っている事もあり精神的に不安定になりやすいのは分かっていた。そんな状態で不良に絡まれるというのはやはり精神的ダメージも大きくなるだろう。

見舞いに行こうかとも考えたのだが何分精神の問題だ。先生にも止められてしまったし、多分言っても家の人に止められてしまうだろう。そもそもメールさえ返ってこない位なのだ。下手にショックを与えるのは避けるべきか。

誰も座っていない真中さんの席をボーッと眺めていると、不意に三門が話しかけてきた。

「そう気を病むな。何日か待てば会えるようになるだろ。そうすりゃ後は2人で存分にお楽しみになれ」

「お楽しみにって……！まあとりあえずありがとな」

「……」

「何だよ？」

「いや、お前が俺に「ありがとう」だなんて珍しい事もあるもんだな、と」

「お前は俺を何だと思ってるんだよ」

そう言いアキラはふっと笑った。

やっぱり、友達がいるっていうのは良いものだな。

「そういえば今日ってフリータイムだよな、どうする？」

「よし、なら今日こそはハンバーガーを……！」

「生活習慣病に気をつけろよ」

「崎守まであの会長みたいな事言うなよな！」

こんな幸せ、昔は無かった。ここにきて俺は変わっただろうか？俺は皆に何かしてやれただろうか？

今の俺には真中さんや三門、それと……生徒会長。友達が増えている。きっとこれからもそうだろう。

そんな大切な人達に、何か……。



人形や花が部屋の至る所に置かれ、無機質な部屋を彩っている。その部屋の隅にはちょこんと座る一人の少女。

少女は人形を強く抱きしめ、少し先にほうってある携帯電話をただじっと見つめている。

携帯電話が振動し、ランプがチカチカと点滅している。どうやらメールが届いたようだ。

しかし少女は携帯電話を見つめるだけでそれを取ろうとはしない。いや、それ以前に少女の目がうつろなので、本当にそれを見つめているのかも分からない。もしかしたらただボーっとしているだけなのかもしれない。

メールの送信者欄には『崎守君』と表示されている。

きっと崎守君は私の事を心配してくれているんだろうな。でも今はまだメールを見る気分になれない。励ましの気持ちは救われるものだけでも、気持ちが深く沈んでいる時にはそれはただ悲しみを増幅させるものと化してしまう。

人形に顔を埋め、声を殺して泣いた。友達の優しさに悲しくなって泣いた。

涙が人形の目に落ちる。その雫は人形の目を伝って流れていった。悲しい。ただ悲しい。

少女――真中カナンは、今は悲しみを増幅させるだけの友達の名前をぼそっと呟く。

「崎守君……」

その声は、どこか自虐的な響きを含んでいた。



それから1週間、真中さんはまだ登校して来なかった。

P20 崎守の気持ち

「よ、崎守！」

「……なんだ三門か」

「友達に対してなんだは無いだろ！」
今日も朝から喧しい男だ。

それにしても、真中さんが不登校になってからもう一週間が経つか。ずっと心配で仕方が無い。だけど今はあまり気にかけてすぎない事が得策か。これはあくまでも真中さん自身の問題だ。部外者がやたらめったら口を挟むのは逆効果だと思う。今はとりあえず待とう。待ってればそのうちまた元気に登校してくるだろう。

そう考えるようになるまで一週間かかってしまった。それまでは真中さんの事が気掛かりで仕方が無かったのだ。

でも今は大分平気になってきた。慣れた、というのもおかしい話だが、人の感情は時間が経つにつれて薄くなっていくもの。数日前と比べると三門達とも気軽に話せるようになってきていた。

一週間も一緒にいれば相手の事もある程度分かってくる。三門は意外といい奴だ。確かに喧しいし面倒だしアレだが、なんだかんだで人の事をよく気遣ってくれる。

転校してきてから真中さんとばかりいたからか、他の人との関わりが少なかったように思われる。特に仲の良い友達がいなくなって初めて分かる事もあるんだな、と、改めて実感した。

「で、崎守は何をやってるんだよ？」

「ん？普通にスケッチだけど」

「普通につて……。早朝に登校してきて堂々とスケッチしてる奴なんてそうそういないぞ」

俺は黙々とスケッチを続けた。

魔法で描く事もできるのだが、個人的には筆を使って手で描く方が好きなのだ。

「つーか何描いてるわけ？」

仕方なく三門に絵を見せる。

「なんだこれ？生徒しかない教室なんて描いてて楽しいか？」

ちなみに、俺の絵の上手さは自他共に認めている。まだまだ精進は必要だが。

「楽しいさ。俺にとってはここで過ごす一瞬一秒がかけがえのない時間だからな。それに絵ならこの時を記憶以外にも残しておける」

「なら写真でも良いんじゃないか？その方が楽だし鮮明に残せるだろう？」

「違うんだ」

俺はふと窓の外を見る。桜の花は既に散ってしまった。だがそこには新たな葉が青々と自らを主張していた。

「写真じゃ駄目なんだよな……」

放課後――。

「君、図書室で勉強？……じゃないわね。何？絵を描いてるの？」

「……生徒会長か。はあ……」

「なんで人の顔見てため息つくのよ！ちょっと失礼じゃない？」

「ま、どうせ生徒会長だし」

「……本当に失礼な後輩ね。少しは先輩を敬いなさいよ」

話をしている内に描き終わった。さてと、場所を移動するか。

俺は席を立ち図書室をあとする。今日はそこそこ描けたしもう帰るか。

「ねえねえ、なんで絵なんて描いてるの？趣味？」

とりあえず無視してロッカールームへ移動する。

『アルステミア』にはいくつかのロッカールームが存在し、そこにあるロッカーを生徒は一人一つ使用する事ができるのだ。ロッカー自体はあまり大きくないため体操着を掛けたり教科書を置いたりで大分スペースをとられる。それでも生徒はポスターを貼ったり使いやすく吸盤式のフックを増やしたりと個性を出している。寮の部屋

と感覚同じだ。ちなみに俺は美術道具の予備を保管している。

「へえ、綺麗にまとめてあるわね」

「うわっ！なんで会長……。ここ男子ロッカーだぞ！？」

「良いじゃない、どうせ誰もいないんだし。それに、あたしは生徒会長よ？要するに見回りよ、見回り！それなら問題ないでしょ？」

「問題大有りだと思います！」

ちょうど靴も履き変えたし支度も終わった。誰かに生徒会長が見つかるともた面倒なのでさっさと退散する事にしよう。

「それで、君は絵を描く事が趣味なの？」

「……答えなきゃ駄目ですか？」

「駄目。拒否権は無いわ」

「……まあ、確かに趣味といえば趣味なんですけどね。昔から絵とか好きでしたし。でもそれだけじゃなくて……。昔、仲の良い友達がいって、その友達に助けてもらった事があって。その時にお礼について、友達に絵をあげたんです。拙い絵でしたけど、友達は本当に喜んでくれて。だから、絵を描いてると今でも思い出すんです。その友達の事。大切な思い出なんです。……って、なんで生徒会長にこんな事言ってるんだろ？ああ、やっぱ言わなきゃ良かった！」

「ふうん……」

絶対馬鹿にされる。

そう思っていたのだが、意外にも生徒会長は真面目な顔をしていた。

「好きなの？その子の事」

「へ？いや！別に……。それにまだ女だとは言ってませんし」

「分かるわよ。好きなんでしょ？」

「……はい。昔からずっと。その気持ちは今でも変わりません」

「そっか……」

生徒会長は少し寂しそうな顔をした。

その顔を見た時、ふと真中さんの事が浮かんた。が、何故から分からない。

「……あ、あたしの家はこっちだから。じゃあね！また明日も元気

に登校する事！遅刻しちゃ駄目よ？」

「分かってますって！」

「うふふ、どうかしらね？」

そう言う会長は走り去ってしまった。

俺は一人で下校路を歩く。一人だとやはり寂しいものだな。

「さってと！家に帰ったら何しようかな」

夕焼け空をカラスが一羽、どこかに鳴きながら飛び去っていった。

P 2 1 真中の気持ち



カナンが不登校になってから五日後――。

あれから五日も経っているため、大分気は楽になっていた。でもまだ誰にも……、強いて言うならアキラには会いたくはない。

別にアキラの事が嫌いという訳ではない。むしろ好き、と言っても差し支えはない。だからこそ。今のこんな自分を見られたくない。カナンはベッドの上に寝転がりながら枕元に置かれたクマのぬいぐるみを抱き寄せた。昔から嫌な事があった時にはいつもこのぬいぐるみを抱きしめていた。その慣れ親しんだ感触はカナンの心を落ち着かせる一番の道具であった。

だが、今は抱きしめても、心は落ち着きこそすれ悲しみを癒すまでには至らなかった。

カナンはベッドから起き上がり、クマのぬいぐるみを抱きしめながら携帯電話を手にとった。

「未読メール 6件」

差出人は全て『崎守君』。

多分、登校してこない自分の事を心配してくれたのだろう。五日前の時は聞く事ができなかったが、心が大分落ち着いている今なら大丈夫だろうか。

でもまだ抵抗がある。手が震える。

開きたい。

『崎守君』の気持ちを知りたい。

その気持ちとは裏腹に。

開きたくない。

まだ誰の言葉も聞きたくない。

一向にメールを開こうとしない自分に痺れを切らし、カナンはロッ

ドを手を取った。

ロッドの方は携帯電話とは違い気軽に持てる。

「『デディークロール』」

『デディークロール』は一時的に人形に心を持たせる魔法。心を持った人形は言葉を話す事ができ、また低学年の小学生と同じくらいには考える事ができるようになる。あまり難しい事は話せないが、人の気持ちを感じ取りやすいという点はやはり小さな子供と同じだ。

「ねえ、クマさん。崎守君からのメールを開いても大丈夫だと思う？」

あくまでも人と話している訳ではないため、緊張する事もないし言葉遣いを気にする必要もない。なので自然に話す事ができる。

「カナンはどう思うの？」

「私は……。……知りたい。崎守君の気持ち。でも怖くて……。崎守君の優しさは知ってる。でも、だからこそ。もし拒絶されていたら……。そう考えると怖くて堪らなくて……」

「そうなんだ」

クマは腕を組んで考える。

「うーん……。いつもカナンから聞く崎守の話聞く限り、まず間違はなく拒絶はされてないと思うな。きっと心配してくれてるんだよ」

「それは分かる。頭では。でも駄目なの。もし崎守君が……。って考えるだけで震えが止まらなくて……。そういう自分が凄く哀しくて……」

カナンの目から一筋の涙が零れた。

「私は崎守君の事が好き……」

ぬいぐるみをギュッと抱きしめる。

「だから、崎守君に会いたい……。その気持ちは本当。なのにそれを縛り止める自分もいるの。一人でいたいって、そういう自分が……。ねえ、どうしたら良いの？ 私は……」

「カナン……」

クマはそつとカナンの涙を拭いた。

「大丈夫。僕もついてるよ。だから、崎守を信じてあげて」

「本当に……、大丈夫？」

「うん、大丈夫。だから、さ。見てあげてよ。崎守の気持ち」

「……。……。うん、分かった」

カナンはメールを開いた。

そこには、崎守君のまっすぐに温かな気持ちが詰められていた。また涙が零れた。

でも今度はクマも涙を拭こうとはしなかった。

ありがとう、崎守君。

でもまだ少しだけ待っていて下さい。

あと少ししたら私の心も晴れると思います。

そうしたら、また元気にお話できますから。

だから、あと少しだけ……。

P22 久々の再会

アキラがメイコ（生徒会長）と下校した次の日の朝――。

「はぁ……」

「あら？どうしたのアキラ。食欲無いみたいだけど」

いつも通り朝食を食べていると、不意に母さんが首を傾げながら聞いてきた。

「あ、まさか料理が美味しくないとか言うんじゃないでしょうね」

「いや、いつも通り絶品だよ。そんじょそらの料理人に負けない位のハイクオリティ」

「あ、あら、そう？それは嬉しいわ。うふふ♪」

「ふう……」

母さんは気分を良くしてキッチンへ戻ってしまった。

昨日の生徒会長との会話で改めて感じた。時の流れは本当に不思議なものだ、と。

俺が『アルステミア』に転校してきてから二週間近くが経った。ということは、俺がハナと離れてから経った時間も同じくそれくらいという事だ。

なのにここで色々な出来事がありすぎて、既に前の学校での思い出が薄れてしまっている。

なのに、俺のハナに対する気持ちは変わらないままだ。

真中さんの事は心配だが、しかし今はハナと連絡をとりたい気分だ。残念ながらハナは携帯電話を持っていなかったため連絡のしようが無いが。

ま、それはそうと。

今日の目玉焼きはまさに傑作だな。程よい焼き加減、固すぎず柔らか過ぎない絶妙な固さの黄身。どこを取っても悪い所無しだ。

考え事に必死でなかなか箸を進められなかったが、それはまたなんと勿体なく、かつまた有意義な事をしたのだろう。

さて、んじゃこの目玉焼きを余す事無く堪能……。

「アキラ、時間大丈夫？」

する時間など俺には残されていなかった。

「お、崎守！今日は随分と遅いんだな」

「なんだ、三門か……」

「人の顔見てなんだは無いだろ！つーかそれは昨日もやったし！」
ま、どうでも良い。

しかし、昨日に引き続きまた喧しい朝になるのか。全く、こういう日にはろくな事が無いんだよな……。

「あ、おはようございます、崎守君」

三門に無駄話をされながら教室に入ると、そこには一週間も待ち続けた相手がいた。

「真中さん！？もう平気なのか？」

「はい、おかげさまで。あと、その……、心配をかけてしまったようで、本当に、すいませんでした……」

「いや、気にする必要はないよ。でも良かった、真中さんが元気になって」

「崎守の奴、この一週間ずっと真中真中ってしつこかったんだぜ？」

「三門は黙ってろ！」

「ふふっ……」

あ、真中さんが笑った。やっぱり可愛い。

「そういえば、私がいなかった間に、何か面白い事がありましたか？」

「面白い事……か」

ここ一週間の記憶を一通り洗い出す。まだ友達もそれほど多くないし真中さんもいなかったため、ほとんどが三門か生徒会長関係だ。

「そういやこの前のフリータイムにまた三門と生徒会長がもめたな。ファーストフードについて」

「全く、なんであいつはファーストフードの素晴らしさが分からないんだろうな？なんつったってファーストフードは安さと美味さと早さが魅力だからな。その事を説明したらあいつ、なんて言ったと思う？『同じ条件ならハンバーガーより牛丼の定食でも食べた方が良いじゃない』だよ。確かに牛丼は美味いんだけど、そうじゃないんだ！ハンバーガーと牛丼じゃ手軽さが段違いなんだよ！」

「あーはいはい。分かったから少し黙っててくれ」

「な？ 崎守も分かるだろ？」

「分かったから。分かったから声のトーンを下げてくれ」

渋々黙る三門。毎度の事だが三門は何故これほどまでにファーストフード、特にハンバーガーにこだわるのだろう？疑問だ。

「あと面白い事と言えば……」

「崎守は毎日のようにスケッチしてた」

「え？ そうなんですか？ 私も見たいです」

「それはまた……今度にしてくれ。今整理中なんだ」

「そんなに、たくさん描いたんですか？」

「たくさんとは言ってもせいぜい十数枚だけだな」

「それでも多いですよ」

「そうかな？」

「そうです」

昔から大量に描いているからか、少し感覚が麻痺しているのかもしれない。十数枚……、今では驚く程の枚数に感じなくなってしまう。

「しかもこいつ、結構上手くってよ！ いつの間にやらギャラリーが増えてんだよ」

「え？ そうだったのか？ 全く気がつかなかった……」

「ま、皆崎守が描き終わる前に散ってたからな。仕方が無い」

集中しすぎてたか？

人がいても気がつかない……。もし何かあったりしたらヤバそうだな。少なくとも絵を書いてる時には何も起こらないよう祈ろう。

「今度、私の事、描いてもらっても、良い……ですか？」

「うーん……。とりあえず練習してからで良いか？人物画はあまり慣れてないからさ」

「はい！その時はお願いしますね！」

くっ、その期待を抱く眼差しが眩しい！

キンコンカンコンコン――

「ん？いつの間にかこんなに時間が経ってたのか。もうホームルームが始まるな」

『アルステミア』ではホームルームの直後にすぐ授業が始まる。

「ではまた一時間後位に」

「ああ、そうだな」

「その時は俺も――」

「さてと、今の内に授業の準備でも始めるか」

「なんで俺は無視なんだよ！？」

今日はまた楽しい一日になりそうだ。ま、喧しい一日にもなりそうだけどな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4386/>

アルステミア ～花と心と恋の唄～

2011年8月15日14時26分発行